学校法人
同朋学園

学校法人同朋学園―学園創立100周年

DOHO GAKUEN 1921–2021

学校法人同朋学園
学園創立100周年


100th
anniversary
1921 同朋学園 2021

目次

学校法人同朋学園――4
同朋大学――10
名古屋音楽大学――22
名古屋造形大学――34
同朋高等学校――46
同朋幼稚園――60

●名古屋キャンバス――〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
学園本部・同朋大学・名古屋音楽大学・同朋高等学校・同朋幼稚園

●小牧キャンバス――〒485-8563 愛知県小牧市大草年上坂6004
名古屋造形大学

学校法人同朋学園は、創立100周年を機に学園のシンボルマークを一新しました。



学校法人
同朋学園

新シンボルマークの制定にあたって2020年度に公募を行い、970点の中から採用作1点を選出しました。

デザイン／三村章太（プロダクトデザイナー）

〈制作意図〉「同朋」の文字をシンプルに3つの○と捉え（同朋 ⇒ 同月月 ⇒ ○○○）、位置も大きさも異なる○を組み合わせ、「同朋」のイニシャル「D」を形作りました。これは、異なる個性を持った人が確かな結びつきを持つことで初めて生まれる価値があることを意味しています。色彩は、成長を予感させる「緑」をベースに、知性を意味する「青」を少しだけ混ぜることで、学生が知的好奇心を持って成長するイメージを表現しました。



これまでの100年、これからの100年。

学校法人 **同朋学園**





学校法人 同朋学園 理事長　甲村和博

同朋学園は、1921年6月13日に文部大臣から専門学校令に基づき真宗専門学校の設置を認可されてから、今年で丁度100年になります。同朋学園の歴史を遡れば、1826年に青木楽聞夫婦の寄進により開設された閲蔵長屋に始まります。その後、同朋大学、同朋幼稚園、同朋高校、名古屋音楽大学、名古屋造形大学が設置認可を受け、現在では3大学と高等学校、幼稚園の5機関からなる教育機関に発展いたしました。ここに至るまでの先人達の物心両面にわたる労苦は並大抵のものではなく、その献身的なご尽力に深く感謝致します。

次の100年に向けて進化の歩みを続けていくのが、今を託された我々の責務であると考えます。今般、名古屋市営地下鉄名城線名城公園駅真上の公務員宿舎跡地約2万㎡を取得することができました。名城公園が道路を挟んで対座しており、名古屋のシンボル名古屋城天守閣が間近に望めます。名古屋駅、金山駅から至近にあり、静岡、京都などからも通学が可能となります。ここに名古屋造形大学を全面移転し、未来型の美大を創造します。同時に同朋学園のキャンパスとして各機関が利用して、それぞれの新たな教育を創造していきます。

「個性をもった集団の和」がより良い社会を創生するものだと信じております。同朋学園は、これからも個性をもった5機関が互いにそれぞれの個性を尊重し、切磋琢磨しながら協力、協同して、同朋和敬の教えを実践して参ります。

	同朋大学	名古屋音楽大学	
1826（文政9）年　閲蔵長屋開設 ●1 **同朋学園** 1921（大正10）年　真宗専門学校開校 ●2 理事長に一柳知成が就任 1926（大正15）年　名古屋別院内に校舎 1938（昭和13）年　理事長に稲葉圓成が就任 1942（昭和17）年　八事新校舎へ移転			
1950（昭和25）年 稲葉地新校舎へ移転 理事長に安田 力が就任 1950年　朝鮮戦争始まる 1951（昭和26）年 財団法人真宗専門学校、学校法人同朋大学に 1957（昭和32）年 理事長に山上正尊が就任	1950（昭和25）年 東海同朋大学開学 1959（昭和34）年 同朋大学と改称		
1964年　東京オリンピック 1965（昭和40）年 法人名を「学校法人同朋学園」に改称 1969（昭和44）年 理事長に藤井香嶺が就任	1961（昭和36）年 仏教学部を文学部に、社会福祉学科増設 1962（昭和37）年 本館校舎竣工 1964（昭和39）年 国文学科増設 1966（昭和41）年 鉄筋校舎三階建増築竣工	1965（昭和40）年 名古屋音楽短期大学開学 1967（昭和42）年 専攻科設置、新館増築	
1970（昭和45）年 理事長代行に栗田圭哉が就任 1970年 日本万国博覧会（大阪） 1973年 オイルショック 1975（昭和50）年 理事長に栗田圭哉が就任 1977（昭和52）年 同朋学園佛教文化研究所開設	1970（昭和45）年 新館校舎鉄筋三階建新築竣工 1975（昭和50）年 図書館竣工 1979（昭和54）年 知成館（研究棟）竣工	1975（昭和50）年 A号館竣工 1976（昭和51）年 名古屋音楽大学開学 1978（昭和53）年 名古屋音楽短期大学廃校 1979（昭和54）年 C号館竣工	
1985（昭和60）年 理事長に宇治谷祐顕が就任 1989（平成元）年 理事長に濱田耕生が就任 1989年 平成に改元	1982（昭和57）年 知文会館竣工 ●3 1984（昭和59）年 社会福祉学部設置	1986（昭和61）年 D号館改築 1987（昭和62）年 大学院音楽研究科設置	



1.『名古屋草叢書』古渡東本願寺辺之古覧（現・名古屋別院）閲蔵長屋は境内の東南隅にあった





2.真宗専門学校学祖の住田智見と1926年に名古屋別院に建てられた真宗専門学校校舎

1921年—2021年、同朋学園100年の歩み

江戸期・文政年間に東本願寺名古屋掛所・名古屋御坊（現・真宗大谷派名古屋別院）境内で「閲蔵長屋」が開設されたことに、同朋学園の淵源があります。そして、1921年に真宗専門学校を開校して以来、5つの教育機関を擁する学校法人として歩み続け、2021年創立100周年を迎えました。

	名古屋造形大学	同朋高等学校	同朋幼稚園
		1958（昭和33）年 東海同朋大学附属高校開校 1959（昭和34）年 同朋高等学校と改称、商業科開設	1952（昭和27）年 同朋幼稚園開園 1953（昭和28）年 同朋幼稚園設置認可 1955（昭和30）年 木造園舎竣工 1959（昭和34）年 講堂兼遊戯室竣工
	1967（昭和42）年 名古屋造形芸術短期大学開学 1968（昭和43）年 本館増築 1969（昭和44）年 専攻科設置	1965（昭和40）年 体育館兼講堂竣工 1967（昭和42）年 衛生看護科・音楽科開設	
	1975（昭和50）年 実技棟新館竣工、 環境デザイン棟新館竣工	1972（昭和47）年 本館（校舎・特別教室）竣工、校歌制定 1975（昭和50）年 本館増築、庄内川緑地に第2運動場設置 1979（昭和54）年 新体育館竣工	1978（昭和53）年 二階建鉄筋園舎竣工
	1983（昭和58）年 Dギャラリー開設 1985（昭和60）年 造形短大 小牧キャンパスに移転 ●4	1983（昭和58）年 C号館竣工 1988（昭和63）年 C号館増築 1989（昭和64）年 クラブハウス竣工	



3. 1982年 知文会館 竣工



4. 1984年 建設工事中の小牧キャンパス

同朋学園	同朋大学	名古屋音楽大学	
1991（平成3）年 理事長に本田眞哉が就任 1991年　バブル崩壊 1995年　阪神・淡路大震災 1996（平成8）年 学園創立75周年 ●2 1999（平成11）年 理事長に祖父江照道が就任	1993（平成5）年 同朋大学仏教文化研究所開設 ●3 1994（平成6）年 いのちの教育センター開設 1995（平成7）年 社会福祉学部附属福祉臨床・情報センター開設	1992（平成4）年 成徳館 竣工 ●1 1994（平成6）年 音楽教育学科を音楽学科に	
2001年 アメリカ同時多発テロ 2005（平成17）年 Doプラザ閲蔵竣工 2005年 日本国際博覧会（愛知） 2008（平成20）年 理事長に小島隆治が就任	2005（平成17）年 大学院博士後期課程開設、 大学の文学部日本文学科を人間文化学科に改組	2002（平成14）年 音楽公演センター開設 2007（平成19）年 名古屋音楽大学附属音楽アカデミー開設 2008（平成20）年 博聞館（めいおんホール）竣工 ●6 2009（平成21）年 勝友館（食堂棟）竣工 ●7	
2011年 東日本第震災 2012（平成24）年 理事長に甲村和博が就任 2019年 令和に改元	2015（平成27）年 大学院人間福祉研究科に臨床心理学専攻設置、 心理臨床センター開設	2010（平成22）年 新B号館（奏楽館）竣工 2012（平成24）年 善友館（クラブハウス棟）竣工	
2021（令和3）年 学園創立100周年			





1. 1996年 成徳館竣工（左／外観全景、右／最上階のホール）



2. 1996年 同朋学園75年史発行





3. 現在の同朋大学仏教文化研究所（Doプラザ閲蔵内）　4. 2004年 同朋高等学校 A号館・D号館竣工



5. 2007年 名古屋造形大学 G棟竣工

	名古屋造形大学	同朋高等学校	同朋幼稚園
	1990（平成2）年 名古屋造形芸術大学開学 図書館・D2ギャラリー開設、工房棟竣工 1992（平成4）年 F棟竣工 1996（平成8）年 体育館竣工	1994（平成6）年 B号館・クラブハウス竣工 1999（平成11）年 衛生看護科募集停止	
	2000（平成12）年 D棟増築・E棟竣工 2003（平成15）年 短期大学の名称を名古屋造形芸術大学短期大学部に 2007（平成19）年 G棟竣工 ●5 2008（平成20）年 短期大学の学生募集停止 大学の名称を名古屋造形大学に	2001（平成13）年 衛生看護科廃止 2004（平成16）年 A号館・D号館竣工 ●4	2009（平成21）年 園舎増設、園庭拡張 ●8
		2011（平成23）年 C号館増築（ゼミ室、多目的ホール） ●9 2012（平成24）年 B号館・C号館改修、校内グラウンド整備 2016（平成28）年 B号館・体育館改修	2018（平成30）年 園舎改修
	2020（令和2）年 コースから5領域へ改変 2022（令和4）年 名城公園キャンパスに移転開学予定		2020（令和2）年 園庭改修 ●10



6. 2008年 博聞館竣工（左／外観全景、右／めいおんホール）





7. 2009年 勝友館（食堂棟）竣工



8. 2009年 同朋幼稚園 園舎増設、園庭拡張



9. 2011年 同朋高等学校 C号館増築（写真はゼミ室）



10. 2020年 同朋幼稚園 園庭改修



「共なるいのちを生きる」の具現化を目指して。

同朋大学





同朋大学 学長　松田正久

同朋大学の学校としての歴史は、1921（大正10）年6月13日に「真宗専門学校」の設置された時までさかのぼることができ、2021年は同朋学園全体として100周年の年になります（1826〈文政9〉年の「閲蔵長屋」〈学園の淵源〉設立からは195年の時を経たことになります）。

また2020年は、宗祖親鸞聖人の真宗の教え「同朋和敬」を建学の理念とし、真宗専門学校の流れを汲み、新制大学として1950年に出発した東海同朋大学（1959年に同朋大学と改称）の創立から70周年でした。しかし、COVID-19のため、同朋大学として特別な記念行事は行えず、学園創立100周年の中で、併せて記念することとしました。

もともと、「宗門有用」の人間育成の願いから仏教学部仏教学科として発足した同朋大学は、1961年には学部を文学部に変更して社会福祉学科を増設、1985年には社会福祉学部を設置して、現在の二学部体制とし、仏教文化研究所（1977年～）、“いのちの教育”センター（1994年～）を併設する体制で現在に繋がっています。

詳しくは、『同朋学園75年史』に譲りますが、その後、2003~4年にかけて大学院の設置（文学・人間福祉の2研究科）など、教育・研究の充実に努めてきました。2015年には、人間福祉研究科に臨床心理分野を加え、心理臨床センターを併設し、地域の期待に応え多くの相談活動を行っています。2020年には、大学院を改組し、人間学研究科仏教人間学専攻（仏教文化分野・人間福祉分野・臨床心理分野）を開設しました。

同朋大学は、少人数教育に徹し、学生一人ひとりの顔が見える教育を実践する大学、多様な学生が共に学ぶことができる大学を目指しています。そのため、障がい者のための入試枠や障がい者のための奨学金を設けています。バリアフリーの大学づくりを進め、聴覚障がい学生や視覚障がい学生のための授業支援も学生自らノートテイカーやアイカーとしてこれらの障がい学生の学びを支援しています。そのため障がい学生支援室を設置して学生・教職員がサポートしています。また、学生相談室で臨床心理士が学生相談にあたり、健康管理室で看護師が健康のケア、実習指導室では事務部と一緒に資格取得のための実習対応支援にあたっています。また、アカデミック・アドバイザー教員制度の下に、すべての学生がアドバイザー教員の指導の下に、学修相談や生活相談をすることが出来ます。加えて、大学では強化スポーツクラブとして、野球・女子バスケット・柔道・女子サッカーを指定し、スポーツ技能特待制度を設けていますし、学生のボランティア活動も盛んで、多様な学生が、文学部と社会福祉学部で学んでいます。大学院生は、授業の援助者として学習の学びを支援しています。これが「共なるいのちを生きる=共に学び、ともに歩み、ともに育つ」大学の具現化です。

混迷を深める世界や日本にあって、今こそ人間の教育が求められています。同朋大学は、その期待に十分応えられる地域に根ざした大学でありたいと、学生・教職員ともども、1万人を超える卒業生の皆さんと共に、次の100年に向け、その一歩を着実に刻んでいく覚悟です。

同朋大学の歩み

1921（大正10）年
・名古屋別院境内に真宗専門学校創立
・校長に一柳知成が就任

1938（昭和13）年
・校長に稲葉圓成が就任

1942（昭和17）年
・学舎を八事（名古屋市昭和区滝川町）に移転

1950（昭和25）年
・現在地に東海同朋大学を開設（文学部仏教学科）、入学定員40名、初代学長 稲葉圓成
・学長に安田 力が就任

1955（昭和30）年
・学長に山上正尊が就任

1959（昭和34）年
・大学名を「同朋大学」と改称

1961（昭和36）年
・仏教学部を文学部に改組（仏教学科・社会福祉学科）、入学定員70名

1964（昭和39）年
・文学部に国文学科（入学定員20名）増設

1969（昭和44）年
・学長に小島叡成が就任

1977（昭和52）年
・仏教文化研究所開設

1979（昭和54）年
・知成館（研究室棟）竣工

1981（昭和56）年
・学長に寺倉 襄が就任

1982（昭和57）年
・同朋大学知文会館竣工

1985（昭和60）年
・社会福祉学部社会福祉学科設置
・学長に栗田圭哉が就任

1986（昭和61）年
・別科（仏教専修）開設

1988（昭和63）年
・学長に池田勇諦が就任

1992（平成4）年
・成徳館竣工



1934年 真宗専門学校卒業式



真宗専門学校初代校長
一柳知成



東海同朋大学初代学長
稲葉圓成



東海同朋大学二代学長
安田 力



東海同朋大学三代学長
山上正尊









真宗専門学校 八事校舎 〈中右〉新築記念式典 〈下〉校舎前での教員、学生の集合写真



増築中の東海同朋大学



1953年 東海同朋大学卒業式



東海同朋大学 学舎内



1960年代の同朋大学校舎







〈上〉図書館 〈下左〉女子寮「白百合寮」〈下右〉男子寮「樹心寮」


福祉学科誕生

同朋大学新聞

1961年 社会福祉学科誕生を報じる同朋大学新聞



仏教学科 授業風景



国文学科 授業風景

1994（平成6）年
・同朋大学“いのちの教育”センター開設

1995（平成7）年
・社会福祉学部附属福祉臨床・情報センター開設
・学長に畝部俊英が就任

1999（平成11）年
・学長に沼波政保が就任

2003（平成15）年
・大学院文学研究科（仏教文化専攻・文学専攻）開設

2004（平成16）年
・大学院人間福祉研究科（人間福祉専攻）開設

2005（平成17）年
・社会福祉学科に社会福祉専攻と幼児福祉専攻設置
・Doプラザ閲蔵（図書館・ギャラリー・多目的ホール等）竣工

2008（平成20）年
・博聞館（研究室・演習室・実習指導室等）竣工

2009（平成21）年
・文学部の学科名称変更（仏教学科・人文学科）
・社会福祉学科の専攻名称変更（社会福祉専攻・子ども学専攻）
・学長に武元 勲が就任

2010（平成22）年
・学長に中村 薫が就任
・学長に尾畑文正が就任

2012（平成24）年
・学長に浅野玄誠が就任

2015（平成27）年
・大学院人間福祉研究科に臨床心理学専攻設置
・あわせて心理臨床センター設置

2016（平成28）年
・学長に太田清史が就任

2018（平成30）年
・学長に松田正久が就任

2020（令和2）年
・大学院人間学研究科仏教人間学専攻（仏教文化分野・人間福祉分野・臨床心理分野）開設



1979年 知成館（研究室棟）竣工





1992年 成徳館竣工　〈下〉成徳館最上階のホールでの卒業式



2008年 博聞館（研究室・演習室・実習指導室等）竣工



博聞館1階エントランス







2005年 Doプラザ閲蔵（図書館・ギャラリー・多目的ホール等）竣工

「共なるいのち」のありかを問い続けた70年。

真宗大谷派の専門校として、「宗門有用」の人間を養成するために1921年に開校した「真宗専門学校」は、戦後の学制改革を受け、1950年に広く有縁の青少年に門戸を開く「東海同朋大学」として新たな一歩を踏み出しました。大学昇格の認可が下りるまでには、それまで学舎のあった八事から、新たに稲葉地キャンパスにより広い敷地を確保し、教授陣の充実をはかるなど、多大な努力が払われました。宗門関係からは、寺院子弟および真宗門徒のためであった学舎を一般大学へと変革する意義はどこにあるのか、という疑問も寄せられたそうです。これに対して初代校長一柳知成の後を継ぎ、大学昇格に心血を注いだ二代目校長稲葉圓成は、内に向けては宗門内に仏教徒としての自覚を高め、また外に向けては戦後日本の復興に必要な文化的貢献を成すため、と四年制大学化の意義を定義しました。「仏教文化は東洋的文化の精髄であり、基督教文化の西洋的文化と並んだ世界の二大文化であることはいうまでもないが、再建日本はこの仏教文化の基盤にうち樹てられるべきである。そして仏教文化の精華を拓くことが、世界文化に貢献するところ甚大であることはいうまでもない。こういう見地から仏教主義による学園が設けられて、一般国民の教養にあたり、仏教文化が究明されねばならない」… これが大学設立趣意書にうたわれた設立の趣旨です。

とはいえ開設時は仏教学部仏教学科の一学科のみ、定員は一学年40名と小規模なものでした。そんな小さな大学が、しっかりと名古屋・中村の地に根を降ろし、親鸞聖人の「同朋」精神と聖徳太子の「和敬」の精神を具現化し展開する〈叡智と実践〉の拠点となるまで、私たちはいくつかの重要な転機をくぐり抜けてきました。

1959年、東海同朋大学から「同朋大学」と名称を改めたこの年、東海地方は伊勢湾台風に襲われました。前年に鉄筋校舎を竣工していたこともあって、大学そのものはさほど大きな被害を受けま



成徳館7階 大谷派教師課程室





報恩講



伝道部







本山修練に向けて作法の練習

せんでしたが、学生や教職員の自宅については、浸水、倒壊、半壊などの報告が後を絶ちませんでした。このとき、台風直撃後の10月から11月にかけての1ヶ月ほど、仏教学科の在学生全員が分担で、長期の浸水地域にある寺院を訪問し、清掃奉仕や雑役奉仕、救援物資の配送作業に参加しました。視聴覚研究部は、被災地の寺院を訪ね、避難児童たちを対象に、紙芝居や人形劇などの慰問活動を行ったそうです。建学の理念である同朋精神が、このような災害ボランティア活動を通して具体的に展開されたのでした。2年後の1961年4月、新しく社会福祉学科（定員40名）が設置されました。福祉の精神によって普遍的な「社会的平等な単位としての人間」を明らかにしつつ、仏教精神によって「個別化された個々の人間の魂にふれるもの」が仏教福祉である、と初代社会福祉学科長の守屋 茂は言っています。

いわゆる「第2次ベビーブーム」の世代が高校を卒業し始めた1964年、同朋大学には国文学科が創設されます。「再建日本にふさわしい東洋的文化の復興」を設立時の趣意にうたった同朋大学にとって、それは自然な成り行きとも言えました。文学とは人間を学ぶもの、そして人間を学ぶことは教室の中だけでは到底できない。それが国文学科のモットーで、かつてはどのゼミでも合宿やコンパを盛んに開き、夜を徹して議論することも珍しくなかったと言います。時代は1960年代、全国的に展開した学生運動の波に、やがて同朋大学も呑み込まれていきました。学生ストや正門バリケード封鎖が行われるなか、「学園エゴイズムの克服」というスローガンのもと、学生たちと学園当局との真摯な話し合いの場が持たれました。

激動の時代を終え、若者の価値観が世代共闘の意識から個人主義へと大きく転換した1977年、「同朋学園設立の趣旨にのっとり、広く仏教文化の研究と興隆に寄与し、もって地域社会に貢献すること」を目的として、同朋学園仏教文化研究所（現在の同朋大学仏教文化研究所）が開設されます。開設当初は、建学の理念である同朋精神を再認識するための研究テーマとして『歎異抄』を選び、月2回の「歎異抄研究会」や『歎異抄』に関する古写本、版本、注釈書、研究論文などの収集、そして『歎異抄』関係文献の調査旅





箱庭療法を学ぶ社会福祉学科心理学コースの学生



〈上〉介護実習 〈下〉博聞館1階 入浴実習室



手話サークル



博聞館3階 文学部研究室

行の実施および公開講座開催などの活動を行いました。また広く東海地域の寺院所蔵資料の収集と整理が実施されました。その結果、所蔵する大蔵経が愛知県から文化財に指定されるなど、いくつかの貴重な成果をあげるに至っています。

社会福祉学科再編の動きは、1980年代に入ってすぐに始まりました。福祉に対する社会のニーズの多様化・複雑化に応え、より高い資質の社会福祉専門従事者を養成すべく、1985年、文学部から独立して社会福祉学部社会福祉学科が設置されました。同時に、18歳人口の増加を踏まえた臨時定員増を実施、文学部仏教学科（定員40名）・国文学科（定員60名）、社会福祉学部社会福祉学科（定員80名）の2学部3学科制（学年定員180名、総定員720名）となりました。また1986年には、真宗専門学校時代より併設されていた「東海専修学院」を、定員30名の「同朋大学別科（仏教専修）」としました。

日本経済がバブル期に入っていく1990年、同朋大と名音大の新たな共用校舎として、稲葉地に鉄骨12階建て、高さ53.1メートルの高層建築が着工されました。1992年に完成し、学祖住田智見の院号「成徳院」に因んで「成徳館」と名づけられたこの建物は、名古屋駅西では類を見ない高度をもつシンボル・タワーとなりました。そしてこれをきっかけに、1994年に同朋大学“いのちの教育”センター開設、1995年に社会福祉学部附属の福祉臨床・情報センター開設と、様々な組織の拡充が行われました。また1995年に阪神淡路大震災が起こると、学生の提案がきっかけで、100名を越える学生たちが現地のボランティア活動に向かいました。真宗大谷派大阪教務所に宿泊施設の無償提供を受け、大阪ろうあ会館、大阪障害者センターなど障害者を対象に活動を行い、これがきっかけで「同朋大学ボランティアネットワーク（DVN）」が発足いたしました。

21世紀を迎えると、2003年に大学院文学研究科（仏教文化・文学専攻）、2004年には人間福祉研究科が開設されています。バブル崩壊と同時に日本の18歳人口もピークを越え、大学はただ、高校を卒業した若者だけを対象とする学びの場ではなくなりました。学部終了後も引き続き研究生として在籍する方、リカレント編入学される









大学祭





夜の勝友館（食堂棟）

社会人の方、定年を迎えて生涯学習を志す方など、学びのニーズは多様化しました。そのような状況に柔軟に対応しつつ、教育と研究の質を維持し、さらには高めていくために、大学院の設置は必須と言えました。2005年からは博士後期課程がスタートしています。

同じ2005年、社会福祉学科は「社会福祉専攻」と「幼児福祉専攻」の二専攻体制となりました。1968年の保母課程開設以来、幼児教育・保育学は社会福祉学科の重要な一部門でした。それを高い独立性をもつ専攻として立ち上げたのです。幼児福祉専攻は2009年に現在の「子ども学専攻」へと名称を変更しました。また文学部の2学科も同年、それまで変遷を重ねて「仏教文化学科」「人間文化学科」となっていた学科名称をシンプルな「仏教学科」「人文学科」へと改め、そのまま今日に至っています。

2015年、大学院人間福祉研究科に臨床心理学専攻および心理臨床センターが設置されました。心理学は近年きわめて人気の高い分野で、同朋大学ではすでに社会福祉学科に心理学コースが設けられていました。心理学を専攻する学生たちの特徴のひとつとして、大学院進学率の高さが挙げられます。これは資格取得とも直接に関連するため、本学も大学院に、特に臨床心理学の専攻を設け、かつ設備を充実させて、カウンセラーや相談員を目指す学生たちの後押しをすることになりました。

以上、同朋大学70年の歴史を大きく俯瞰してみました。仏教学部仏教学科の単科大学として出発して以来、社会福祉学科、国文学科（現：人文学科）、子ども学専攻、そして大学院研究科、臨床心理専攻と、小さなキャンパスなりに、着実に新たな学びの領域を開拓し、多様化してゆく時代に向けて、建学の理念「同朋和敬」を実践的に展開すべく歩みを続けてきた姿を、少しはご紹介できたでしょうか。「同朋和敬」とは私たちひとりひとりが、同じ「いのち」を生きるがゆえに、互いの「いのち」を敬い生きることであり、またそのようないのちの連携を通して、人智を超えたおおいなるいのちはたらきに気づき、その尊さにめざめてゆくことです。そのために何よりも「人間」を学ぶこと。これが時代の変遷を越え、全ての学科、専攻、コースを貫く同朋大学の基本精神です。





社会福祉専攻 授業風景





成徳館1階ホール



Doプラザ閲蔵5階からの名古屋駅方向の眺望　その先の愛知県東部の山並みも望める


女子バスケットボール部




柔道部


剣道部

かつてない2020年を越えて、その先に見えるもの。

2020年、人々の生活を大きく変えた新型コロナ感染症の世界的拡大は、大学教育の場にも深い影響を与えました。この春、全国の多くのキャンパスでは新学期の授業開始が遅れ、学生が学外からパソコンやタブレット、あるいはスマートフォンで講義を受ける授業形態が急速に普及しました。私たち同朋大学にとっても、この緊急時に手探りで遠隔授業に取り組んでみて、ICTを活用した授業スタイルの様々なメリットを学ぶことができました。ただその一方、やはり同朋の学びは、基本的には対面授業に立脚していなければならないとも確信しました。なぜなら、本学の教育は「共なるいのちを生きる」というスローガンのもと、人々が互いの差異（ちがい）を認めあい、それぞれの個性を輝かせ、共に生きていけるような社会の実現を目指して、少人数教育による直接指導、学生一人ひとりと直に触れ合うコミュニケーション、講義室や演習室で向きあっての対話を、とても大切にしているからです。

その点において、私たち教職員が学生に向かう基本姿勢は、これから先も現在と何ら変わりません。ただ、より一層の充実と、非常時への柔軟な対応をはからなければいけないとは感じています。

同朋大学では現在、アカデミック・アドバイザー（担任）制度、教員のオフィスアワー制度といった一般的な修学支援はもちろん、ほかにもいくつか、独自な学生サポートを行っています。「障害学生支援室」では、教職員の指導のもと、聴覚障害者のためにノートテイクを行うテイカー、視覚障害者に対するリーディングサポートを行うアイカーらを養成し、学生アルバイトとして雇用することで、学生同士による相互支援を促しています。また、年に数回行われている「同朋大学三者協議会」は、学生代・職員・教員の三者によるユニークな協議会です。体育会代表、文化会代表、そして各学科代表などか



女子サッカー部







野球部

らなる学生代表のみなさんが、日ごろの学生生活を通して大学に感じている疑問や問題点、改善してほしい要望などを直接、教職員に伝え、よりよい大学作りのために三者が討議を行います。審議の結果は教授会に報告され、必要と判断された改善点については可能な限り実行します。こういった学修支援体制、学生生活支援体制も、コロナにより必ずしも十分に活用できませんでした。その反省も込めて、向後は非常時下の学生対応の見直しを含め、さらなる充実と発展を目指したいと思っています。

またクラブ活動について言えば、同朋大学は現在、野球部、女子バスケット部、柔道部、女子サッカー部をスポーツ強化クラブに指定して特待生枠を設けています。本学では、たとえ特待生でも学修上の特別待遇はせず、特待生に対しては、出席も講義も他の学生と同様にとりくんで単位を取得し、そのうえでさらにスポーツで輝き、それでこそ特待生と呼ばれるようになってください、と激励しております。とはいうものの、彼ら彼女たちが実力を磨くための練習環境は、今はまだとても十分とは言えません。グラウンドや体育館を含めたスポーツ施設の整備、これが喫緊に解決しなければならない大きな課題です。

2020年度より同朋大学大学院は、従来の文学研究科と人間福祉研究科をひとつに統合し「人間学研究科 仏教人間学専攻」として再スタートしました。ひとつの専攻のなかに「仏教文化分野」「人間福祉分野」「臨床心理分野」の3分野が共存することになり、分野共通の必修科目も設けられています。かつて仏教学部仏教学科から始まり、それぞれの学部、学科に分かれてそれぞれの専門性を高めていった各専攻が、ここで横断的に結びつくこととなりました。博士後期課程の完成年度はまだしばらく先ですが、新制度に基づく学位取得者が誕生するそのとき、本学の蒔いた種から、建学の精神に基づく仏教人間学の新たな精華がまた開くことになります。

名古屋音楽大学



2019年 定期演奏会 モーツアルテウム（ピアノ／岡田清花）



2013年 オーケストラとソリスト（声楽／趙 ちな）

めいおんから、地域、社会、世界へ。



名古屋音楽大学 学長　佐藤惠子



名古屋音楽大学は時代の推移とともに、その時々に学生も多様化し、大学も変化しています。音楽大学に期待される「専門を深く学べる大学」としていつの時代も「学び」を大切に「音楽の好きな学生」を大切にと、建学の精神「共なるいのちを生きる」とぶれる事無く、歩んでいます。

1965年に名古屋音楽短期大学を定員数50名で開学し、1976年には名古屋音楽大学が定員数100名で開学され、東海地方ではいち早く1987年には大学院を設置し、2021年には56年目を迎えます。時には大きくなった大学を、18歳人口の減少を見据え、教育の質の充実を目指し、学部定員数を120名の15コース、大学院定員数18名の4専攻の「専門を深く学べる音楽大学」です。日本のトップレベルの意欲溢れる教員も揃い、成徳館、DOプラザ閲蔵、博問館、勝友館（食堂）、奏楽館（B号館）、3つのホール、「めいおんホール」「成徳館12Fホール」「DOホール」と、環境も整備され、学びの環境は全て整っています。

2020年は新型コロナウィルスの猛威とも言える勢いに、「学生達の学びの確保」に試行錯誤し、「芸術は人生に不可欠」と言われながらも、演奏会開催ができず、世界中の音楽家達は苦労しています。今後もコロナ禍で様々な影響を受けている政治、経済、社会の変化とともに、以前より人間関係の構築の難しい時代になると想像できます。

そのような時代にも学生が対応できるように大学では、技術だけでなく、アカデミックな常識を身につけ、卒業後、自分自身の芸術を見つける素養を学びます。そして学びを通して、人間力を養います。でもこれからの時代は、音楽家は専門分野への豊かな見識や技術を身につけているだけでなく、そこに何かプラスアルファが必要とされます。コースの垣根が低く、学生個人の希望に寄り添える名古屋音楽大学ならではの学び、学生の企画・運営で開催される「めいおん音楽祭」での経験を通して、プラスアルファを身につけ、社会で必要とされる人に成長し、逞しく人生を歩んで欲しいと願っています。

グローバルな大学をめざし、海外の大学との提携を積極的に進め、2020年10月、単位互換制度を利用してザルツブルク・モーツァルテウムに学生を送り出しました。コロナ禍、滞在許可取得も難しく、大変なプロセスでしたが、学生一人一人に教員アドバイザーのいる名古屋音楽大学だからこそ実現したことでした。

2022年名城公園に名古屋造形大学が移転し、多目的ホールが建設される今、名古屋音楽大学のサテライトとして、ホールでの合奏の授業展開を計画しています。またピアノ演奏家コース、大学院生の「リサイタル」「公開講座」を広く名古屋市民に公開し、名古屋市の「芸術」の拠点となる一端を名古屋造形大学とともに担います。

「同朋学園・名古屋音楽大学」は、専門を深く学べる大学とともに、学生に寄り添い、社会に必要とされる人材育成を目指し前進します。

名古屋音楽大学の歩み

1965（昭和40）年
・名古屋音楽短期大学（音楽科）を開学
・学長に山上正尊が就任

1969（昭和44）年
・学長に宇治谷祐顕が就任

1975（昭和50）年
・A号館竣工

1976（昭和51）年
・名古屋音楽大学を開学
音楽学部に器楽学科・声楽学科・作曲学科・音楽教育学科を開設
入学定員 100人

1979（昭和54）年
・C号館竣工

1985（昭和60）年
・学長に水野久一郎が就任

1987（昭和62）年
・名古屋音楽大学に大学院音楽研究科（修士課程）を開設

1989（平成元）年
・学長に岡本泰氏が就任

1992（平成4）年
・成徳館（レッスン棟）竣工

1993（平成5）年
・学長に住田石梁が就任

1994（平成6）年
・音楽教育学科から音楽学科に名称変更
・音楽教育コース・音楽学コース・電子音楽コースを開設

1999（平成11）年
・学長に今榮國晴が就任

2000（平成12）年
・完全セメスター制による新カリキュラムの実施
・声楽学科に歌曲コース、オペラコースを設置
・作曲学科にコンピュータミュージック専攻、電子オルガン専攻を設置

2002（平成14）年
・名古屋音楽大学に音楽公演センターを開設
・弦楽専攻でクラシックギターとマンドリンの募集を開始



1965年 短大開学当時の校舎



1965年 短大開学記念式典



1966年度 短大2期生入学式



1965年 短大開学当時の校舎



1971年当時の名古屋キャンパス周辺



レッスン風景



短大開学当時の教室



1968年 専攻科 第1期生（短大1期生）

2003（平成15）年
・器楽学科に邦楽専攻（箏・三味線・尺八）を設置
・声楽学科に舞踊・演劇専攻を設置
・音楽学科に音楽療法専攻を設置
・音楽学部で社会人入学、社会人編入学を開始

2005（平成17）年
・学長に田中千香士が就任
・ジャズ専攻を設置

2006（平成18）年
・学長に大口光子が就任

2007（平成19）年
・名古屋音楽大学の音楽学部の改組
（器楽・声楽・作曲の3学科の募集を停止し、音楽学科に統合）
・名古屋音楽大学附属音楽アカデミーの開設
（音楽公演センターの閉鎖）

2008（平成20）年
・博聞館竣工
（300席の音楽専用ホール、アンサンブル室、練習室等から成る新校舎）

2010（平成22）年
・学長に高橋 肇が就任
・新B号館（奏楽館）竣工

2011（平成23）年
・コンピュータミュージックコースを映像音楽コースに再編
・メジャー・マイナー制導入

2015（平成27）年
・ピアノ演奏家コースを設置
・大学院 器楽専攻にオルガン・チェンバロを設置

2016（平成28）年
・学長に佐藤恵子が就任

2017（平成29）年
・作曲コース・映像音楽コースを作曲・音楽クリエイションコースに再編

2021（令和3年）年
・舞踊・演劇・ミュージカルコースをミュージカルコースに再編
・大学院 教育学専攻にノードフ・ロビンズ音楽療法士育成課程を設置


1975年 A号館竣工パース図


1976年 大学（短大移行）開学記念式典


図書館



1980年 音大完成形態樹立（開学五周年）を讃える会



1981年 パイプオルガン完成記念式典



1977音大 研究紀要創刊号



名古屋音楽大学ガムラングループ スカルサクラによるジェゴグ演奏



1987年 大学院第1回入学式



2008年 博聞館（めいおんホール）竣工



2020年 演奏部改修



授業風景

人と人をつなぐ。音楽のもたらす調和。

名古屋音楽大学の前身、名古屋音楽短期大学は1965年に創立されています。専門性の追求への強い意志を、2年後の専攻科設置に見ることができます。教員と学生との距離が近く、濃密な師弟関係の下、知識や技能の獲得以上に「人と人」との関係性を育んでいくことが学び舎をともにするもののエネルギーとなっていきます。進取の意気、という言葉を絵に描いたような出発でした。当時の校舎は現在勝友館（学食）のある場所に位置していました。後にB号館と呼ばれることになります。1975年に現A号館が完成し、翌1976年に四年制大学として開学すると、音楽学部に器楽学科、声楽学科、作曲学科、音楽教育学科の四つの学科を開設しています。これまで築き上げられた育成のフィロソフィーに、体制による枠組みが与えられました。四学科立ち上げ時、器楽学科にはピアノ専修の他に弦楽専修があり、管楽専修、打楽専修は1978年になって設けられています。

四学科時代の音楽大学の中心となったのは器楽学科、特にピアノ専修でした。音大に進学する、という言葉の意味するものが限りなく「ピアノが弾けること」と等しかったのです。ピアノ専攻学生が全学生の半数近くを占め、東海地区の音楽専門教育において、ピアノを学ぶなら名古屋音楽大学、と評価されていたと言えるでしょう。卒業生のキャリアデザインの中で「ピアノ講師になる」という選択肢が上位にあり、「音楽教室経営」であっても実質的にピアノを年少の子供たちに教授することが求められていました。



2019年 管楽 シンフォ（指揮／露木 薫）



（2019年 定期演奏会（ピアノ／杉浦僚馬）



2019年 トリエナーレ シェイクスピア

名古屋音楽大学の歩みは、この四学科が起点となっています。短大時代の若く熱い可塑性に富んだ教育力が、その後に続く飛躍のための基礎としての四学科を構築したのです。この四学科時代を支えた校舎はA号館、B号館の他に1979年に完成したC号館、1985年に小牧キャンパスに造形大学が移転後、同朋大学と音楽大学が共有したD号館という四つの建物でした。このほかに、オペラなどの舞台系学習で使用されたE号館、練習棟として使用されたF号館（同朋大と共有）がありましたが、当時の姿を今に残しているのはC号館のみになっています。現在でも建設当時と変わらず使用されている成徳館（1992年完成）がG号館なのは、AからFまでの校舎がすでにあったためです。

元号が平成に変わった頃、学科という枠組みの下に「コース」という履修のモデルを設けて多様な学びを提供することが推進されます。最初の試みとして1994年に音楽教育学科を音楽学科と名称変更し、音楽教育コース、音楽学コース、電子音楽コース、という3コースを設置します。音楽大学の中で電子楽器（電子オルガン）を学ぶためのカリキュラムを提供する、という試みです。これに先立つ1987年に大学院音楽研究科を設置することで、音楽大学の目指すものとして専門性への志向が強く示されましたが、コース制導入とともに多様性も求められるようになります。

専門性と多様性は、本来相反する方向性です。しかし、音楽を学ぶものの見つめるゴールは多様であって構いません。いろいろな学びがあり、それを束ねる価値観を共有すること、これが音楽大学においては「美しいもの」として確立されていきます。これは学園の掲げる「共なるいのちを生きる」とも協和する目標となりました。

音楽大学は、こうした価値観の共有を「調和（ハーモニー）」とし



2019年 トリエナーレ シェイクスピア



2019年 オーケストラ定期演奏会（ピアノ／中川朋子）



2014年 邦楽



2020年 定期演奏会（マリンバ／島岡里梨香）



1977年 第1回オーケストラコンサートを経て様々な演奏会へ…

て社会に向けて発信しています。同時に、大学での学びの中に個人による技術の研鑽以上に「合奏する」機会を提供できることを目指しています。

教育の多様化への試みは2000年、声楽学科に歌曲コース及びオペラコース、作曲学科にコンピュータミュージック専攻と電子オルガン専攻設置。2002年に弦楽学科にギター・マンドリンのコースを設置。2003年、器楽学科に邦楽専攻、声楽学科に舞踊・演劇専攻、音楽学科に音楽療法専攻を設置。2005年にジャズ専攻を設置。学習内容をカリキュラムとして示し、多様な学びを提供しました。

この頃より専門的かつ多様な学び、という視座が結果として示されたことにより、演奏会の回数が飛躍的に増加しました。それは、大学主催の演奏会にも顕著で、定期演奏会、卒業演奏会という開学以来の演奏会に加え「ピアノ声楽演奏会」「オーケストラとソリストたちの夕べ」「シンフォニックウィンズ定期演奏会」「オーケストラ定期演奏会」などの形で今日まで続いています。ハーモニー、アンサンブルに注力することで、自らの演奏を世に示そうとする積極的な姿勢を学生に育んだ結果、主催演奏会ではない、自主的な公演の増加にも結びついています。

2007年、音楽学部に存在していた四学科を「音楽学科」として一元化し、専修、専攻など呼称が統一されていなかった履修形態による学びの形を「コース」として統一、一学科16コースでの体制に改編されました。舞踊・演劇・ミュージカルコース、ジャズ・ポピュラーコース、音楽ビジネスコース、音楽総合コースが新設されました。この流れの延長として、2011年にコンピュータミュージックコースを映



2019年 電子オルガンコンサート（電子オルガン／山﨑雅也）



2019年 オーケストラとソリストたちの夕べ（サックス／岩田基睦）



2016年 50周年記念オペラ「フィガロの結婚」

像音楽コースに再編しています。

一学科16コース制時代には、それ以前は音楽大学の範疇に含まれていなかった領域を積極的に取り込んでいきました。特に音楽ビジネスコースは「演奏を行わない音大生」を社会に向けて発信し、社会貢献活動やアウトリーチなどの形で、多くの在学生が社会に対してその演奏を披露する際に裏からその活動を支えています。学びの場として、この時期には2008年にかつてのD号館が博聞館として竣工し、F号館や旧B号館に存在した練習室の環境を刷新しました。また、2010年には開学時唯一の校舎であったB号館の改築が終わり、2020年現在使用されている校舎が全て完成しています。

2015年、ピアノ演奏家コースが開設され、学びの多様性を維持しつつも、専門性に特化した学びが選択可能となりました。音楽大学は、その時その場にいることでしか学べない質の高い教育を提供し続けています。

名古屋音楽大学に学ぶ限り、あるコースに属さないと選択できない「専門性の高い授業科目」はごく限られており、望みさえすればいかなる学びも可能になっています。音楽大学としては間口が広がり、学びの形も柔軟になっています。なにより、学ぶことの目的の一つとして“社会に対して音楽を手段として窓を開く”ことが全学生に共有され、キャリアデザインの選択肢は寧ろ広がっています。そんな中でも演奏家、研究者、教育者を選択する者は毎年一定の割合で存在し、その活躍は在学生にとっての励みになっています。



「演奏を行わない音大生」音楽ビジネスコース



2017年 打楽アンサンブル



2016年 オーケストラとソリストたちの夕べ（チェロ／坂上 諒）



生まれ変わるミュージカルコース



ノードフ・ロビンズ音楽療法士資格取得が大学院で可能に



音楽をより多くの人へ届けるために、さらに発展する音楽ビジネスコース



「専門性」と「多様性」の伝統を次の次元へ

建学の精神である「共なるいのちを生きる」の考え方を礎に、名古屋音楽大学は、その発展を続けてきました。専門性と多様性という、相反する方向性を「調和（ハーモニー）」として位置付け、名古屋音楽大学はその教育的役割を果たしてきました。専門性でいえば「ピアノ演奏家コース」に代表される、専門を深く学べる環境を持ちながら、様々な機会を通して、他コースの学生と共に学ぶ機会があります。その例として、アンサンブルや演奏会での共演や、資格取得課程、指導法プログラムでの学びがあります。全てのコース生が自分の専門性に軸足を置きつつ教員免許や音楽療法士の資格取得を目指すことができ、現在では通信課程で、小学校と特別支援の教員免許も取得できます。さらにピアノ指導法プログラムや吹奏楽指導者養成プログラムを通して、演奏家としてだけではなく、指導者としての学びを得ることもできます。このような機会を通して学生は、クラスメートや教職員と建学の精神を学び、社会に還元しています。

それでは今後名古屋音楽大学は、どういう方向に進むのでしょうか？「共なるいのちを生きる」という建学の精神を基礎に、これまでの専門性と多様性の学びを踏襲しながら、地域、社会、世界とつながる教育を提供していくことになるでしょう。専門性の充実といえば、2021年度より舞踊・演劇・ミュージカルコースが、ミュージカルコースに改編され、名実共にミュージカルに特化した学びができるようになります。従来の歌唱だけでなく、様々なダンスレッスンも充実し、より専門性の高いコースとなります。それと同時に、卒業公演では、これまで同様に音楽ビジネスコース生と協働で作品を作り上げていくことになります。

地域とつながるといえば、現在本学が存在する中村区の稲葉地という地のみならず、造形大学が移転する北区名城二丁目という地においても、地域と繋がり連携していく活動を広げていきます。造形大学にできる多目的ホールにおいて、様々なリサイタルや公開講座、フィールドワーク実習、インターン、アウトリーチなどを実施し、より多くの名古屋市民のために貢献します。また、造形大学の学生や教職員とのコラボレーションも進めていくことを希望しています。コースの垣根を超えた多様な学びをしてきた名古屋音楽大学が、今度は大学の垣根を超えた学びに試みたいと思っています。



海外教育機関との連携

地域、社会、世界と、「共なるいのちを生きる」

社会とつながる教育として、これまでの音楽を聴衆に「聴かせる」専門教育に加えて、より多くの人に「届ける」ための専門教育も行います。これまでの音楽を教える指導者や教員の育成に加え、音楽を様々な場面で市民に届けるための専門家を、音楽ビジネスコースにて育成します。コンサートホールでの企画運営のみならず、スタジオにおける音楽制作や録音、インターネットを活用したコンテンツの制作や配信などについて学びます。そしてインターンやアウトリーチを通して、実際に社会とつながる教育を専門的に学びます。また音楽療法コースでは、大学院にてノードフ・ロビンズ音楽療法士の資格取得が日本で初めて可能となり、より高い専門性を通して、様々な障害や病気のある人に対する音楽療法を届けられるようになります。

世界とつながる教育として、さらなる国際的な学術交流を続けていきます。「世界に羽ばたく演奏家を育てる」というコンセプトのもとに生まれたピアノ演奏家コースから、さらなる人材育成に向けて尽力します。客員教授陣とのダブルレッスンの充実や、各種演奏会など演奏の機会を通して能力を発揮してもらいます。また、モーツアルテウムなどの海外教育機関との連携を通した更なる学びの機会を支援します。声楽コースもユニークな留学経験のある教員の経験を活かし、その経験に基づいた本学独自のカリキュラムや指導法の体系化、海外の音楽院や劇場研修所などとのタイアップを進めます。この様な機会を通して、名古屋から世界に羽ばたく音楽家の育成を目指します。

このように「共なるいのちを生きる」の考え方を、地域、社会、世界とつながる教育を通して提供していきます。話が大きくなりましたが、授業やアンサンブルで学んだ「仲間作り」に必要なことを大切にすることが、建学の精神につながるでしょう。舞台の上の演奏家は輝いていますが、それは舞台に乗らない多くの人の支えがあってこそ初めて成立することです。周囲への感謝の気持ちを忘れない、想像力と創造力を兼ね備えた人間力溢れる人材の育成を目指すのは、これまでと何ら変わりません。本学ならではの、コースの垣根を越えた学びは、学生たちの中に大きな成長を促します。それを地域、社会、世界で発揮していきたいです。

2022年4月、名古屋造形大学は名古屋市・名城二丁目に移転します。名古屋の街に開かれた大学をつくります。
大きな屋根が浮いているような建築。構造素材は高強度、長寿命のプレキャストコンクリート。



短大から大学へ、そして新しいキャンパスへ。

名古屋造形大学

CITY BEAUTIFUL

NAGOYA ZOKEI UNIVERSITY OF ART & DESIGN





名古屋造形大学 学長　山本理顕

「現代社会の精神文化高揚のため、芸術分野の人材育成が急務」と考えた同朋学園は、名古屋音楽短期大学に続いて、1967年に名古屋造形芸術短期大学を名古屋市中村区稲葉地に誕生させました。短期大学であっても、四年制大学に匹敵する人材を育成しようという意気込みで教員陣が集まったと当時の記録にありますが、教員の熱意により各分野やそれを越えての学生との関わりがとても深かったこともうかがえます。

造形短大の誕生と同じ高度経済成長期に、この地域に芸術大学やデザイン系専門学校が続々とできました。それは、日本経済の変化に伴なう美術界の隆盛やデザイナー需要の高まりと重なっています。その後、1980年代にかけ造形短大の学生数は増加の一途を辿り、広いキャンパスを求め1985年に同じ愛知県内の小牧市大草へ移転することになります。

その5年後の1990年、さらなる造形教育の多様化と造形研究の深化を目指して「名古屋造形芸術大学」が、定員100名で開学しました。

以降、短大との併設を20年近く続けましたが、18歳人口の急減期を経ていく中で、短大は2008年に学生募集を停止、大学は名称を「名古屋造形大学」に変えながらコース再編を重ね、定員を伸して現在の240名に至っています。

郊外への移転から一時代が過ぎ、2010年代には多くの大学が都心回帰に向かいました。同朋学園においても、名古屋市北区名城二丁目に用地を求め、名古屋造形大学のキャンパスを移すこととなりました。2020年に分野編成を5つの領域制に変え、2022年4月からは新しい地で再スタートを切ります。

短大から始まり、大学と合わせて54年の歩みとなった名古屋造形。この間、社会も様相が大きく変わりましたが、本学も大きな変化を何度も乗り越え、今また新たな転換点を迎えています。開学の頃と同じように、これからも学生と教員が熱く濃い繋がりを持てるような教育機関を目指していこうと考えます。

名古屋造形大学の歩み

1967（昭和42）年
・名古屋造形芸術短期大学開学（造形芸術科）、入学定員50名
・学長に山上正尊が就任
・日本画、洋画、彫塑、プロダクトデザイン、ヴィジュアルデザインの5コース

1968（昭和43）年
・本館増設

1969（昭和44）年
・3月に第1回卒展開催（以降、毎年開催）
・学長に楳山龍雄が就任

1973（昭和48）年
・入学定員を150名に変更

1975（昭和50）年
・学長に辻 親造が就任
・染織コースを新設

1977（昭和52）年
・学長に寺 光彦が就任

1981（昭和56）年
・入学定員を240名に変更
・造形芸術科を絵画・彫塑専攻とデザイン・工芸専攻に分離

1983（昭和58）年
・Dギャラリー開設

1985（昭和60）年
・小牧市大草に移転・開学
・造園デザインコースを新設
（後にランドスケープデザインコースに改称）
・臨時定員増が認可される

1986（昭和61）年
インターメディア（総合芸術）コースを新設
入学定員を420名に変更

1990（平成2）年
・四年制の名古屋造形芸術大学開学（造形芸術学部）、入学定員100名
・短期大学は入学定員を320名に変更
・図書館を新設
・桃美会（保護者会）が誕生

1993（平成5）年
・創立30周年記念 同窓会記念事業「平安古代窯」復元

1994（平成6）年
・学長に平岩俊郎が就任







1960年代後半の名古屋キャンパス　造形短大の建物も増築された







〈上段〉小牧キャンパス全景　〈下段左〉移転時の新聞広告　〈下段右〉キャンパス外周部での平安古代窯復元












名古屋キャンパスでの授業風景 他　〈中段右〉芸術祭でのパレード　〈下段中〉旧・愛知県美術館での卒展　〈下段右〉男子寮







〈上段左〉キャンパスの一角に日本庭園もつくられた　〈上段右〉図書館　〈下段〉高蔵寺ニュータウン内で一棟を借り上げた女子寮と年に一度の寮祭

1996（平成8）年
・体育館を新設

1997（平成9）年
・カーネギーメロン大学との合同教員作品展「日米のイメージ交流」開催

1998（平成10）年
・学長に石黒鏘二が就任

1999（平成11）年
・高蔵寺ニュータウン内の女子寮を廃止

2000（平成12）年
・大学は入学定員を180人に変更し、従来の2学科5類編成を2学科7コース編成に改編
・短期大学は入学定員を190人に変更

2001（平成13）年
・短期大学で第1回AO入試を実施

2002（平成14）年
・短期大学は絵画・彫塑専攻を美術専攻、デザイン・工芸専攻をデザイン専攻に変更

2003（平成15）年
・名古屋造形芸術大学大学院を開設(造形芸術研究科)、入学定員10人
・大学は入学定員を200人に変更
・短期大学は校名を「名古屋造形芸術大学短期大学部」に変更、入学定員を110人に変更

2006（平成18）年
・学長に高北幸矢が就任
・大学は入学定員を260人に変更し、2学科9コース編成に改編
・短期大学部は専攻を廃止、入学定員を80人に変更

2008（平成20）年
・大学は校名を「名古屋造形大学」に変更し、学部を「造形学部」に変更、1学科（造形学科）17コース・クラス編成に改編
・短期大学部は学生募集を停止
・G棟を新設

2009（平成21）年～2016（平成28）年
・大学はコース・クラス改編を重ね、9コースに

2012（平成24）年
・学長に小林亮介が就任

2018（平成30）年
・学長に山本理顕が就任

2020（令和2）年
・1学科5領域に改編
・2022（令和4）年の名古屋市北区名城2丁目への移転・開学を目指し、新設工事を着工











小牧キャンパスは、移転当初は造成地そのものだったが、毎年植樹を重ね30数年を経る間に緑豊かな地に変わっていった









〈上段〉1996年 体育館新設　〈下段〉2008年 G棟新設

1996年 カーネギーメロン大学との合同展と学内での制作風景















90年代後半のキャンパス〈中段左〉と2010年のキャンパス〈上段左〉 この間に、いくつかの建物の増設と植栽の成長が確認できる



学内のD-1ギャラリー



球技大会、後に「五月祭」となる



芸術祭（大学祭）







美術、デザイン、そしてエンタテインメント。向き合ってきた54年。

同朋学園は、芸術分野を担う人材育成を目指して、1967年に名古屋造形芸術短期大学を開学しました。初代学長・山上正尊は、「2カ年という教育機関であっても、四年制大学に匹敵する人材を育成しよう」という強い意気込みを示し、その思いは学内だけではなく東海地区に広まっていました。また、その教育を担う教員陣には、芸術分野の権威に対して、自分で道を切り開いていく「在野精神」で臨む気風の人々が集まってきていました。教授会の中でも「在野」という言葉が頻繁に使われていて、それぞれの方針に楔のように打ち込まれていくようでした。当時、この地域の美術界、中でも日本画や彫刻分野においてこの言葉が輝いており、近隣の芸術大学が権威団体系の教員を多く招いていたことに対するカウンター的な存在といえました。

教員たちのこうした考え方は学生たちにも大きな影響を与え、どの分野においても教員と学生の関わりはとても熱く濃いものでした。当時の授業には、一定期間他分野の表現を体験してくる「副科実技」という時間があったこともあり、その繋がりは分野を越えて広がりました。美術理論の教員の活動や授業がもとになって、美術館やギャラリーへよく出かける学生も多く見受けられました。

キャンパスが都市部にあり、地域のコミュニティとの一体感があったことは、授業以外の時間の教職員や学生の間のコミュニケーションもとても豊かなものにしました。初期の頃の名古屋キャンパスでの芸術祭（大学祭）では、御輿を担いで周辺地区をねり歩いたり、名古屋音楽大学と合同開催することもあり、こうした活動が地域によく根付いていました。

•

従来、芸術に関わる教育機関は、絵画、版画、彫刻、空間表現、映像表現、身体表現などの美術と、情報伝達、生活環境、製品・道具それぞれのデザインの分野を取り扱ってきました。その後、時代が進むにつれ、マンガ、アニメーション、ゲームなどのエンタテインメントの分野まで幅を広げていくことになります。












造形短大も開学以降、美術とデザインの分野をつくっていく中で、具体的な制作を行うための工房を整えていきました。名古屋キャンパスに学園5機関が共存していた時期、アトリエは学生がいっぱいで研究室も狭いという状況でしたが、そんな中でも特徴的な工房がいくつもありました。フィンランド製の織り機を揃えた織り工房、工程の体験ができる染め工房、校舎の通路で設けられた石切り場、写真スタジオ、印刷実習室などがあげられます。

•

1960年代の高度経済成長期の後、70年代を経て80年代に入り再び日本経済が活況を呈する中、同朋学園各機関の生徒・学生数も伸び、名古屋キャンパスは先々の計画を立てる上でスペースを求めるようになっていきました。そして、造形短大が創立から18年目にあたる1985年に小牧市郊外に土地を得て移転することとなりました。

この頃は、多くの大学が広大なキャンパスを求めて郊外へ移っていった時期でもあります。JR中央線の最寄りの駅や桃花台新交通システムの駅からスクールバスを要するものの、名古屋駅から40～50分で通える距離でした。この一帯は、愛知県が「名古屋東部丘陵研究学園都市（あいち学術研究開発ゾーン）」として構想した地域であり、特に取得した土地周辺は国土庁によって学園用地に登録されており、いくつもの教育・研究機関が集積するところと目されていました。

田園地帯の中、小高くなった森が切り開かれ、11万㎡におよぶキャンパスが生まれました。造成当初は一旦生態系が失なわれており、校舎以外何もない状態でしたが、その後の10数年の間に環境は回復していきました。以来、現在まで緑豊かな環境とともにあったことは、学生の精神や創造に大きく貢献するものでした。

•

この小牧キャンパスにおいても、広大なスペースを活かして工房などの制作の場づくりが積極的に行われました。木工室、金工室、陶芸室、染織工房、版画室、フレスコ室、写真スタジオ、印刷の実習室などの施設と、敷地外周には日本庭園が設けられました。

また、移転8年目の1993年には、短大創立30周年の同窓会記念事業としてキャンパス内に平安古代窯の復元が行なわれまし



た。近隣で住宅地「桃花台」の開発が進められる中、この地域に古窯群があったことがわかり、この事業に繋がりました。夜通し3日間かけて焚くこの登り窯は、長く学生や教職員の作品制作に生かされました。

•

小牧キャンパスへ移転後もバブル経済の絶頂期に向かう中、短大の学生数は最大時420名にまで伸びました。中でもビジュアルデザインコースでは、45名×3クラス=135名の大所帯という状況でした。アジア圏からの留学生も来始めました。

1990年、「名古屋造形芸術大学」(後に「名古屋造形大学」に改称)が同じキャンパス内で開学します。短期大学との併設で定員100名でのスタートでした。大学開設にあたっては、初期の在野精神とユニークなカリキュラムがビジョンでした。しかし、学生を受け入れる入り口、社会へ送り出す出口、競合大学との関係などから、新設した大学がユニークさを維持していくことは難しい課題でもありました。

90年代前半から18歳人口の急減期に入り、次第に造形短大への進学者は減少し、コースの統廃合を繰り返しながら縮小していきました。そして、20年近くに及ぶ大学との併設を経て2008年に学生募集を停止するに至りました。その一方で、大学は名称を「名古屋造形大学」に変えながら、定員も最大で260名まで増やしていきました。現在では240名として、それを充す学生数を得るようになりました。

•

制作環境の特徴として、工房などの施設については先に触れましたが、分野編成の中でユニークな存在だったコースについて触れたいと思います。短大・大学ともに、従来からの教育機関の美術・デザイン分野の捉え方に対して、いかにそれまでと違った要素を取り込むかという試みの連続であったということがいえます。

短大では、早い時期から染織をひとつのコースにしたこと、80年代後半のバブル期とも重なる頃に造園デザイン(後のランドスケー

歴代卒展の会場と展覧会ポスター


旧・愛知県美術館


旧・愛知県美術館


現・愛知県美術館


現・愛知県美術館


国際的デザインセンター・デザインホール


名古屋市民ギャラリー栄


1969年・短大


1970年・短大


1971年・短大


1972年・短大


1973年・短大


1974年・短大


1982年・短大


1983年・短大


1984年・短大


1985年・短大


1986年・短大


1994年・大学


1994年・短大


1995年・大学


1995年・短大


1996年・大学


2002年・大学、短大


2003年・大学、短大


2004年・大学


2004年・短大部


2005年・大学


2010年・大学、大学院


2011年・大学、大学院


2012年・大学、大学院


2013年・大学、大学院


2014年・大学、大学院

プデザイン）を、また、美術で絵画・彫刻とは別にインターメディアを表現分野として置いたことなどがあげられます。

大学では、美術の中に総合造形を立てたこと、社会のデジタル化に伴ないながら情報デザイン（後のメディアデザイン）をコースとして独立させたこと、時代が変化する中で注目される分野としてマンガ、アニメーション、イラストレーション、ジュエリーなどを扱うコースをつくっていったことです。

これらには、その後しっかりと定着したものがある一方、特徴的な分野ほどふさわしい教育陣の確保や内容の充実に難しさがあるものもあり、以降の変遷に繋がっていきました。

•

名古屋造形が学外との関わりを持ち発信してきた活動には、産学官金連携、地域連携、国際交流として行ってきた様々なプロジェクトや展覧会企画があります。それらは、分野や地域に存在感をアピールするものとして今後も積極的に行っていくべきものと考えます。

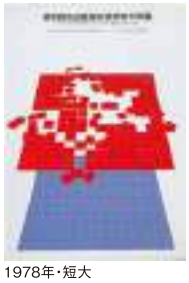
これまで続けてきたこうした活動の中で、卒業制作展を取り上げておきます。名古屋造形では同展を早くから「卒展」という固有の名にして、短大の初期から現在の大学まで愛知県美術館での開催を続けてきました。大学教育の多くは、キャンパス内で行われるものですが、卒業論文や卒業制作は、社会に向けて発信できる大切な機会となります。初期の「短大であっても四年制大学に匹敵する創作を」の意気込みは卒展においても発揮され、公立の芸術大学と同じ美術館で全員参加で発表できることは、学生の意識を大いに昂揚させました。

現在の愛知県美術館は建物の上層階にありますが、旧美術館は地上に立つ独立した建物でした。大通りから階段を上がれば入館でき、一般の人も入って来やすい環境でした。学生数が多く、ゆとりある展示空間とはいえませんでしたが、社会に熱気のある姿を発信する場であったことは確かです。

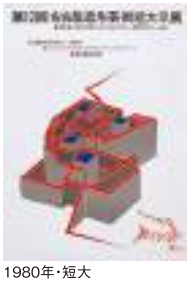

1975年・短大


1976年・短大


1977年・短大


1978年・短大


1979年・短大


1980年・短大


1981年・短大


1987年・短大


1988年・短大

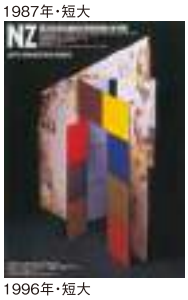

1989年・短大


1990年・短大


1991年・短大


1992年・短大


1993年・短大



1996年・短大



1997年・大学



1997年・短大



1998年・大学、短大


1999年・大学、短大



2000年・大学、短大


2001年・大学、短大


2002年・短大部


2006年・大学


2006年・短大部



2007年・大学



2007年・短大部


2008年・大学、短大部、大学院


2009年・大学、短大部



2015年・大学、大学院



2016年・大学、大学院



2017年・大学、大学院



2018年・大学、大学院


2019年・大学、大学院



2020年・大学、大学院



2021年・大学、大学院



〈外観〉
広いテラスがめぐり、学生たちの活動が外から見えます。
高さを低く抑え、周辺環境に優しい建築を目指します。



〈アートプラザ〉



〈共同工房〉



〈多目的ホール〉



〈アリーナ〉

新しい姿、新しい場で始まる名古屋造形大学。

名古屋造形大学は、短大時代から37年にわたり過ごしてきた愛知県小牧市大草のキャンパスから名古屋市北区名城二丁目に移転し、2022年4月にこの地で再スタートを切ることになります。この界隈は、特に江戸初期の名古屋城築城に伴い城下町が形成された地区であり、その後、現在まで名古屋の産業や文化が育まれたところでもあります。名城公園に隣接し、地下鉄名城線の駅が敷地に接するという交通至便の立地であり、これからの大学運営を考えていく上で願ってもない環境となります。

また、この移転は単にキャンパスを移すというだけでなく、大学の理念や分野編成、教育体制を新しくし、大学そのものが変わっていこうとするものでもあります。

理念としては、都心部へ移転することを機に、すでに2018年度から「都市美」を本学のコンセプトワードに置いています。都市に暮らす人たちとともに、その土地に愛着を持ち、美しく、住みやすい都市空間について探求し、名古屋の未来に貢献する新たな文化・芸術活動の拠点となることを目指します。

分野編成・教育体制については、移転の2年前の2020年度から新しいカリキュラムを始めています。これまで本学は、多くの大学がそうであるように、美術やデザインの中で扱う種類によって分類するコース制をとってきました。それを理念によって5つに分ける領域制に変えることにました。芸術とは何かを問い、大学教育の芸術理論の根幹を担う「美術表現領域」、情景を映像で表現する作品性を文学として捉らえる「映像文学領域」、建築と周辺環境・地域社会との関係を意識して研究する「地域社会圏領域」、他者と共



〈スタジオ〉
大学の教育の中心、創作の中心です。5つの領域が 互いに刺激し合いながら、
作品を作る場所であり、作品を展示する空間でもあります。
外には緑の庭園が見えます。



〈アートストリート〉
大屋根に覆われた大空間にギャラリーやお店が並び、音楽コンサートが開かれます。
多くの人々が集まる、名古屋の新たなシンボルになります。

に居る空間の中で気配りとして行う作法について考える「空間作法領域」、人と人の間に存在する感情・感覚を共感できる表現にしていく「情報表現領域」の5領域です。

そして、この編成の中で学生たちは、1年から2年前半にかけ領域全体での基礎教育を受け、その後、個々の志向により各教員のスタジオ(ゼミ)を選択し、研究を深めていくことになります。本学ではこの課程を通して、専門分野の創作・研究を深めるとともに、分野を横断した広い視野を持ち、積極的に人と人、人と社会を結びつけ提案する力を持った人を育成することを教育の目的としています。

こうした考え方は、新しいキャンパスの設計に繋がっています。敷地の真ん中を地下鉄が南北に貫いている関係から、そこに負荷をかけないため、建物の1階から3階は四方に4つに分散して立ち上がります。この中央には、高さ12m、幅40m、奥行100mの吹き抜け空間「アートストリート」ができます。その上の4階には、これらを全て覆うように100m角ワンフロアの「スタジオ」が続きます。「スタジオ」は、学生が授業を受けたり、各自の創作・研究に取り組む場ですが、壁をなくすことで分野を越えて刺激しあう環境が生まれます。

この4階に対して「アートストリート」は、外に開かれた空間を目指します。本学はもとより学園各機関が持ち味を発揮して活かす共有スペースとして、社会の人々との関わりを持ち、社会の活動に参加する場にしていこうと考えています。これまでのイメージを超えるエンタテインメントから真に実現すべき社会福祉まで、それぞれが行う活動の発信、地域交流や産学連携を趣旨に、この場に訪れる人に教育・研究の過程や成果に触れてもらえる場にします。

新しい理念と新しい環境で再スタートする名古屋造形大学。常に様々なことが展開している、活気と刺激に満ちたキャンパスをつくり出していこうと考えます。



これからも、生徒が主人公の学校であり続ける。

同朋高等学校





同朋高等学校 校長　滝 敏行

同朋高校は、開校以来「真理探究」「相互和敬」「体位向上」の校訓を掲げ、常に生徒を主人公に、「仏教精神に基づき、全人教育を通して、正しい世界観を持つ、個性豊かな人間を育成する」ことを方針に、教育に取り組んできました。

1958年に普通科2クラスで東海同朋大学付属高等学校が開校し、その翌年に同朋高等学校と改称、商業科を加えて同朋高校の歴史は始まりました。その当時は各学年、普通科3クラス、商業科3クラスでした。1967年に音楽科と衛生看護科が開設され、各界で活躍する卒業生を輩出してきました。1999年に看護師制度の変更に伴って衛生看護科の募集が停止され、現在の普通科・商業科・音楽科の形になりました。

60年を超える歴史の中で、同朋高校の教育と呼ばれる実践が作られてきました。服装の自由化、文化祭や体育大会、そして卒業式などの学校行事や様々な学習プログラム、普通科・商業科・音楽科それぞれのカリキュラム、その一つ一つに同朋の教育が大切にしてきたことが生きています。それは、一人ひとりの生徒がどのように輝けるか、どのように生きる力をつけることができるか、ということです。

ICTの技術が進み、知識を得るだけなら学校に通わなくてもできる世の中になってきました。そのような状況だからこそ、学校に通うことの目的がはっきりしてきます。様々な環境、様々な文化の中で育ってきた様々な価値観が、学校という場でぶつかり合い、お互いを尊重し合い、高め合っていく。日常の何気ない会話を通して、授業内でお互いの考えを出し合うことで、学校行事や部活動などの自主活動を行っていく中で。

人間の価値は、ひとつの物差しでは測れません。他の人にない素晴らしい何かを、誰もが持っています。その素晴らしさを引き出し、可能性を伸ばすことこそが、私たちの大きな使命だと考えてきました。それぞれ目標を持って入学する生徒が増え、生き生きとした表情で高校生活を送っています。生徒が主人公。一見当たり前のように思われるこの言葉を、60年を超える歴史の中で実践し続けてきた自負が、同朋高校にはあります。

普通科、商業科、音楽科と、それぞれの特徴を生かしつつ、これからも常に生徒を中心に、命を、一人ひとりを大切にする教育を続けていきます。

同朋高等学校の歩み

1957（昭和32）年
・東海同朋大学附属高等学校として届け出

1958（昭和33）年
・3月、設立許可（普通科6学級編成）
・創設校長に山上正尊が就任
・4月8日、開学（第1学年普通科2学級）
・第1回入学式、校旗樹立
・5月、初代校長に藤井智海が就任
・商業科設置許可（6学級）

1959（昭和34）年
・校名を同朋高等学校と改称
・商業科開設、学級増加認可
（普通科9学級・商業科9学級編成）

1960（昭和35）年
・学園歌設定
・第1回修学旅行（普通科・北九州1周）

1961（昭和36）年
・普通科 第1回卒業式

1962（昭和37）年
・商業科 第1回卒業式
・鉄筋校舎増築（11教室）
・学園祭挙行（竣工記念行事として）

1964（昭和39）年
・学級増加（普通科9学級・商業科11学級）

1965（昭和40）年
・体育館兼講堂完成

1966（昭和41）年
・学級増加（普通科11学級・商業科14学級）

1967（昭和42）年
・特別教室棟（旧A号館）完成（3月）
・音楽科および衛生看護科開設

1968（昭和43）年
・衛生看護科第1回戴帽式を挙行

1970（昭和45）年
・音楽科第1回卒業演奏会
・音楽科および衛生看護科第1回卒業式

1972（昭和47）年
・本館完成
・校歌制定
・創立15周年記念式典挙行

1974（昭和49）年
・ウエサカ祭を開催
・校長に松本義照が就任

1975（昭和50）年
・第1回陸上競技大会
・学校通信創刊号発行
・本館増築

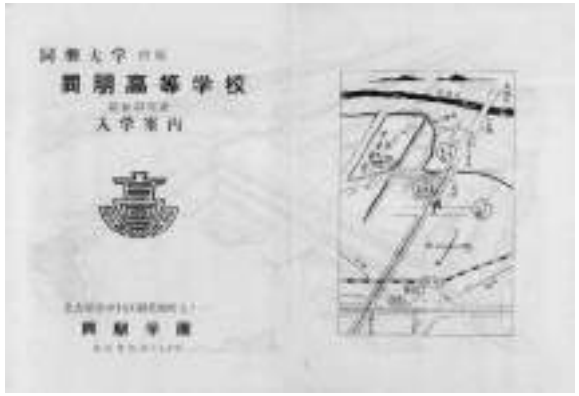
1976（昭和51）年
・第1回卒業を祝う集い
・第1回同朋型文化祭
・定員増認可







1958年 開校当初の校舎と教室



1958年 入学案内



1959年 伊勢湾台風時の様子



1963年当時の校舎と先生方





1970年代の校舎





1961年 普通科 第1回卒業式と普通科 第1回卒業生



1972年 校歌　1959年 校旗



衛生看護科授業風景



商業科授業風景



1960年 第1回修学旅行



音楽科授業風景

1977（昭和52）年
・第1回地域懇談会
・音楽科第1回定期演奏会

1978（昭和53）年
・校長に茜部 淳が就任
・創立20周年記念式典挙行

1979（昭和54）年
・「同朋の教育1」発行
・体育館完成

1983（昭和58）年
・商業科定員増認可
・新校舎（C号館東側）完成
・校長に鈴木 肇が就任

1987（昭和62）年
・校長に小野忠士が就任

1988（昭和63）年
・新校舎（C号館西側）増築完成

1989（平成元）年
・食堂設置

1990（平成2）年
・第1回沖縄修学旅行

1991（平成3）年
・第1回ニュージーランドティキプンガ高校生徒来校

1993（平成5）年
・校長に瀧藤貞明が就任

1994（平成6）年
・第1回同朋教育フォーラム
・第1回ニュージーランドホームステイ
（ティキプンガ高校訪問）

1995（平成7）年
・新校舎（B号館）・クラブハウス完成

1996（平成8）年
・土曜自由選択講座始まる
・体育大会縦割り応援合戦始まる
・服装自由化で三者（後に四者）協議会設置

1997（平成9）年
・校長に林 正雄が就任

1998（平成10）年
・服装自由化実施

1999（平成11）年
・校長に山上正宣が就任
・衛生看護科募集停止

2000年（平成12）年
・文化祭クラス企画「学年ジャンル制」導入

2001（平成13）年
・校長に酒井浩朗が就任
・第1回全校公開授業（同朋教育研究フォーラム）

2002（平成14）年
・海外音楽科研修旅行（オーストリア）

2003（平成15）年
・第1回オーストラリアホームステイ







沖縄修学旅行〈上〉ひめゆりの塔〈中〉資料館で証言を読む〈下〉首里城



1991年 第1回NZティキプンガ高校生徒来校、同朋高校での歓迎会



1994年 第1回同朋教育フォーラム　生徒・保護者・教員で同朋の教育について考える







1998年 服装自由化実施　試行期間を経て、自由服登校が始まった



1996年 土曜自由選択講座始まる〈上〉生徒による車椅子体験講座〈下〉そば打ち体験



2001年 第1回全校公開授業〈同朋教育フォーラム〉保護者とともに授業について考える





2003年 オーストラリアホームステイプログラム始まる　現在はクウィーンズランド州サンシャインコースとにあるUnity Collegeと交流

2004（平成16）年
・校長に高崎友秀が就任
・新校舎(D号館)完成、食堂をD号館に移転
・事務棟（A号館）完成
・教育改革プロジェクト発足

2005（平成17）年
・2年音楽科オーストリア修学旅行始まる
・教育改革初年度
・朝読書スタート

2006（平成18）年
・アドバンストプログラム（AP）、エクステンション
　プログラム（語学系EP・美術系EP）開始
・歌舞伎「名古屋平成中村座」を体育館で
・地域連携型の教育フォーラム「いこまい同朋秋祭り」

2007（平成19）年
・標準服改定
・フレッシュマン合宿（2泊3日・デイキャンプから変更）
・ケニアに机椅子を寄付のため送る

2008（平成20）年
・校長に河合 博が就任
・同朋高校創立50周年記念式典
・親鸞聖人像除幕式（親鸞聖人750回御遠忌記念）

2010（平成22）年
・オーストラリアからホームステイ受け入れ

2011（平成23）年
・新校舎（C号館）増築完成
・普通科に進路別選択授業を導入

2012（平成24）年
・校長に井戸裕久が就任
・B号館C号館改修工事
・照明付き人工芝グラウンドに改修

2013（平成25）年
・医療看護系進学プログラム（MP）開始
・音楽科声楽専攻にミュージカルコース新設
・土曜自由選択講座「同朋セミナー」と改称
・キャリア教育元年

2015（平成27）年
・普通科音楽科で新カリキュラム開始
・土曜特別授業開始
・学校通信200号記念

2016（平成28）年
・校長に梅田 功が就任

2017（平成29）年
・音楽科50周年記念演奏会

2018（平成30）年
・同朋高校創立60周年記念誌発行
・60周年記念体育大会（日本ガイシホール）

2020（令和2）年
・校長に滝 敏行が就任



2004年 新校舎D号館竣工　各特別教室と食堂が整備された







2006年 歌舞伎「名古屋平成中村座」を体育館で



2007年 標準服改定　現在の標準服



2005年 教育改革初年度　朝読書スタート



2005年 音楽科2年生オーストリア修学旅行始まる





2010年 第1回ユニティカレッジ生徒HS受け入れ〈左〉生徒たちによる歓迎会 〈右〉同朋幼稚園への訪問



2012年 人工芝グラウンド（照明付き）竣工



2013年 キャリア教育　分科会で進路と生き方について話し合う





2017年 音楽科50周年記念演奏会〈左〉 サウンドオブミュージックの上演〈右〉

仲間とともに——生徒が輝く学校行事

〈体育大会〉

同朋高校の中で、学校行事はどの時代においても、仲間と共に様々な問題を乗り越えた先のゴールにたどり着いた生徒たちの輝く笑顔であふれています。1970年代前半までの運動会ではクラスごとのマスコットを作成したり、仮装行列で楽しんだりしている様子が当時の写真から伺われます。1975年（昭和51年）からは各種目の記録を競い合う場として「陸上競技大会」と呼ばれるようになりました。当時は稲葉地キャンパスにトラックが引かれ、高跳びや砲丸投げなど様々な陸上競技種目で生徒たちが競い合っていました。1984年（昭和59年）からは従来の個人種目に加え、団体競技も組み込まれ、体育大会と呼ぶようになりました。1994年（平成6年）からは河川敷グラウンドでの体育大会となりました。さらに、1996年（平成8年）からは、現在まで引き継がれている1年生から3年生までの縦割りの応援合戦が始まり、3年生のリーダーシップのもと総勢100名前後の各群団で繰り広げられるようになっていきました。同朋高校の体育大会は例年5月下旬から6月初旬頃に開催されます。1学期のクラス活動の目玉になる行事です。毎年、この体育大会の取り組みを通じて新しいクラスでの仲間作りが行われます。最近では、各群団での学年を超えた縦のつながりが、2学期の文化祭や3学期の卒業式にまで続いていくようになり、お互いを支えあい認め合う気風が育まれてきています。2019年（令和元年）には同朋高校創立60周年を記念して、初めての屋内体育大会を日本ガイシホールにて開催しました。その日は多くの保護者の方にもご参観いただき、生徒たちのはじける姿を存分に見ていただけたことを大変うれしく思いました。

〈文化祭〉

同朋高校の3大行事といわれる「体育大会」・「文化祭」・「卒業式」の中でも最も学校として時間とエネルギーを費やすものが文化祭です。1962年に校舎の竣工記念としての「学園祭」が挙行されたのが始まりのようですが、その後、お祭りの要素を中心とした学







現在の体育大会






1970年代の運動会

園祭から、1976年（昭和51年）には「文化の祭り」が強調された「同朋型の文化祭」として新しい文化祭のスタイルへと変容していきました。有志での参加ではなく、全クラスがテーマを設定して取り組んでいく形はこの時に作られています。当時の学校通信から、担当分掌を生徒会部として指導部（現在の生活指導部）からを独立させ、学校行事の中で生徒の自主性を育てていく道筋が作られていったことがわかります。クラスごとに合唱や演劇・研究・製作など様々な企画に挑戦していく文化祭が、同朋高校の中ではクラスの大きな取り組みとして大切にされるようになっていきました。文化祭で他校生を招待したり、地域の方に見に来ていただく「一般公開」が始まったのは1984年（昭和59年）からのことでした。その後、現在の文化祭のように学年ごとに取り組むジャンルが設定されたのが2000年（平成12年）でした。また実行委員会や生徒会を中心とした「本部企画」では、「平和」や「人権」、「震災」「貧困・格差」といったような、その時代を映し出す社会的テーマにも取り組んできました。

「学年ジャンル制」が始まって20年を迎えます。初めは1年生「製作」、2年生「研究」、3年生「演劇」または「パフォーマンス」というジャンルでした。その後2年生は「同朋ミュージアム」にジャンル名が変更され、見にきた人が体験したり考えさせられるような企画を追求するようになりました。各学年のジャンルごとに最優秀賞である「同朋アカデミー賞」が選ばれます。審査員には教員・生徒・保護者の代表が選ばれ、全クラスの企画を慎重に審査し、アカデミー賞を決定します。特に3年生の「演劇」や「パフォーマンス」の上演は毎年、観る人を感動させてくれています。

文化祭はALL DOHOの取り組みです。各クラスの企画に留まらず、部活動の発表の場でもあります。また、有志の団体によるステージや「保護者と教職員の会（PTA）」や「同窓会」「学園父母懇談会」の皆さんによる各種バザーも文化祭に賑わいをもたらしてくださいます。

2020年度（令和2年）は新型コロナウィルスの影響で「一般公開」や各種バザーを実施することができませんでしたが、また近い将来、実現できる日がくることを祈ります。「文化の祭り」としての「文化祭」がこれからも同朋ではきっと引き継がれていくことでしょう。



文化祭での各企画

すべての生徒に生きる力を――同朋の教育の目指すもの

〈卒業式〉

1961年（昭和36年）の普通科第1回卒業式に始まり、毎年多くの卒業生を送り出してきました。3年生を送り出す予餞会は1976年（昭和51年）から「卒業を祝う集い」と改称され、卒業式とは別の日に1年生、2年生それぞれによる合唱や合唱構成詩、演劇部の上演・ブラスバンド部による演奏などが行われました。そして、1980年（昭和55年）から卒業式はその形を大きく変えました。3年生が「卒業を祝う集い」に観客として参加するだけでなく、「自分たちがやってきたことも伝えたい」と思うようになったことから、その年の卒業式は急遽、「卒業を祝う集い」を合わせて実施することになったそうです。そのようにして、第1部「卒業証書授与式」、第2部「合唱構成詩」を合わせて「卒業式」と呼ぶ「同朋型の卒業式」が生まれたのです。

現在、卒業式の「合唱構成詩」は3年生の卒業式実行委員会を中心にして作られています。その中で、「3年間の高校生活の中で体験したことを振り返り、自分自身を見つめなおし、後輩へ思いを託す詩」が思い出の場面のスライドと合わせて作り上げられます。構成詩の中で歌う合唱曲も初期の頃の斉唱から、最近では三部合唱となり、3年生が素晴らしいハーモニーを響かせてくれます。さらにここ数年は音楽科生徒の活躍によりオリジナルの曲を作詞作曲するほどにまで発展してきています。同朋高校の卒業式は「最後の授業」とも呼ばれています。3年生の足跡を全校生徒と教職員そして保護者で振り返り、心を込めて旅立ちを祝う場にすることが「同朋型卒業式」の特徴といえるでしょう。

〈保護者とともに〉

同朋高校では、保護者の方々が参加される機会が多いとよく言

















同朋高校の手作り卒業式は3年生の最後の授業

われます。開校当時から、保護者が協力的であった様子が50周年を機に編集された「50年の歩み」の中でも述べられています。同朋高校のPTA（「保護者と教職員の会」）の活動は保護者と教職員相互の交流だけでなく、教育作りそのものに保護者の方も主体的に参加していただく機会があることが大きな特徴です。

1977年（昭和52年）に3地区で始まった地域懇談会は、現在全校生徒の通学地域を23地区に分けて、6月下旬から7月初旬にかけて行われ、各地域の最寄りの会場にて教員と保護者の方とでの懇談会を行っています。2020年度はコロナウィルスの感染拡大により実施が見送られましたが、2019年（令和元年）で第43回を迎えました。各地域では学年やクラスの枠を超えて、子供たちのことについて熱心に語る保護者の皆さんの姿が毎年見られます。

また、毎年秋には「オープンフォーラム」（以前は「同朋教育フォーラム」など）と呼ばれている行事があります。ここでは、保護者・生徒・教員に加え大学教員や卒業生・卒業生父母なども参加し、「授業」や「生徒の生活状況」、「子供たちを取り巻く社会情勢」など様々なテーマで、同朋高校での教育活動について一緒に考えていただいています。こういった行事の運営に関してもPTAの活動として保護者の方が準備・運営に関わられ、引き継いでいただいていることが大きな力となっています。

もう一つ、保護者の協力なしには成しえないものがあります。授業料補助金など私学助成金の拡充を求める運動では、署名運動や集会の開催などに教職員と共に奔走していただいてきました。公立と私学における格差をなくすことも、子供たちの健全な成長には欠かせないことを理解いただき、協力してくださる保護者の皆さんに感謝します。かつて同朋高校は1984年（昭和59年）に、映画「それぞれの旅立ち」の撮影会場となりました。すでに取り壊された旧B号館の教室や旧本館の職員室や会議室、保健室が撮影場所となりました。その映画では授業料の格差に苦しむ家族や生徒の様子が描かれ、私学助成金運動の大きな流れを作っていきました。



文化祭PTAバザー



オープンフォーラム分科会



PTA総会



地域懇談会



PTA研修会（バスツアー）


英語エクステンションプログラム Christmas 2015


英語エクステンションプログラム


音楽科ミュージカルコース


美術エクステンションプログラム


ブラインドウォーク


メディカルナーシングプログラム

未来を生きるための、豊かな学びと出会いの場。

〈特色ある3つの学科〉

同朋高校には「普通科」・「商業科」・「音楽科」の3つの学科があります。「普通科」では2年次より「文系」・「美術系」・「理系」・「医療看護系」のいずれかの系統を選択します。それぞれの系統では一人一人の知的好奇心を育み、また希望の進路の実現へと導いていくカリキュラムが用意されています。興味のある分野をより深く学んでいくことで、学ぶことの楽しさや意義を感じていくことができると考えています。また授業では教科書のほかに、教員による独自の教材やICT機器を利用しながら、わかりやすい授業を目指しています。課題を見つけ、調査し、解決方法を見出す、いわゆるアクティブラーニングといわれるような学びも、グループワークやプレゼンテーションなどを取り入れて多くの教科で実施されています。生徒たちの多様なニーズにこたえるための幅広い学習環境をこれからも提供していきます。また、「医療看護系」に進む生徒たちの中には授業外の学習プログラムである「メディカルナーシングプログラム（MP）」に参加して、病院や福祉施設での体験・実習を通じて将来の進路に向けてのモティベーションを高めていく生徒もたくさんいます。医療に携わる人たちが実際に現場で働く姿を間近に見ることは貴重な体験となっています。

次に「商業科」では専門科目の指導が充実しており、簿記や情報処理などの商業系の検定試験では全国平均を上回る高い合格率を誇っています。愛知県の高等学校職業教育技術顕彰制度においては検定合格実績の高い生徒に贈られる県知事表彰を毎年多くの生徒が受けています。2019年度卒業生においては3年生全員が表彰を受けるといった快挙を成し遂げました。また商業科の専門科目の中では、オフィスを再現した広い総合実践室での実践的な学習、ファイナンシャルプランニングやビジネスマナーなど、社会人として将来必要となる知識や教養を身につけることができます。


商業科県知事表彰者


正門前の親鸞聖人像


メディカルナーシングプログラム


メディカルナーシングプログラム

そして「音楽科」では名古屋音楽大学との「高大7年一貫教育」により、大学の教員による指導もあり、高校生の時からレベルの高い音楽教育に触れることができます。さらにマン・ツー・マンの丁寧なレッスンにより、じっくりと実力を身につけることができます。平成25年度からは声楽専攻にミュージカルコースを、平成27年度からは弦楽専攻にクラッシックギターコースを開設し、専門性がより高まりました。生徒たちにとって、アンサンブルやオーケストラ・合唱など年に3回のコンサートホールでの演奏会は、音楽を通じて表現する力を伸ばす良い機会となっています。

・

〈学びと成長の場は教室の外にも〉

同朋高校が学校行事を生徒の成長の場として大切にしていることはこれまでも述べてきましたが、行事以外の各種の活動の中にも生徒の成長の場は見られます。授業後のエクステンションプログラム（EP）として「美術系」に進学したい生徒は美術室でデッサンや色彩構成などを基礎から学ぶことができます。また実践的な英語力を身につけたい人は週2回の英会話レッスンを本校のネイティブの英語教員から学ぶことができます。留学に興味のある人は夏休みにオーストラリアでの2週間のホームステイや3か月～1年間の中期留学に挑戦することもできます。エクステンションは「広がり」という意味です。生徒の興味の「芽」から枝葉を伸ばすことがこの学習プログラムの目指すものです。

授業外の活動では部活動の大切さも忘れてはいけません。好きなスポーツ、共通の趣味を通じて出会った仲間と過ごす時間は、生涯にわたって忘れられない時間となります。同朋高校では多くの部活動で生徒たちが輝いています。

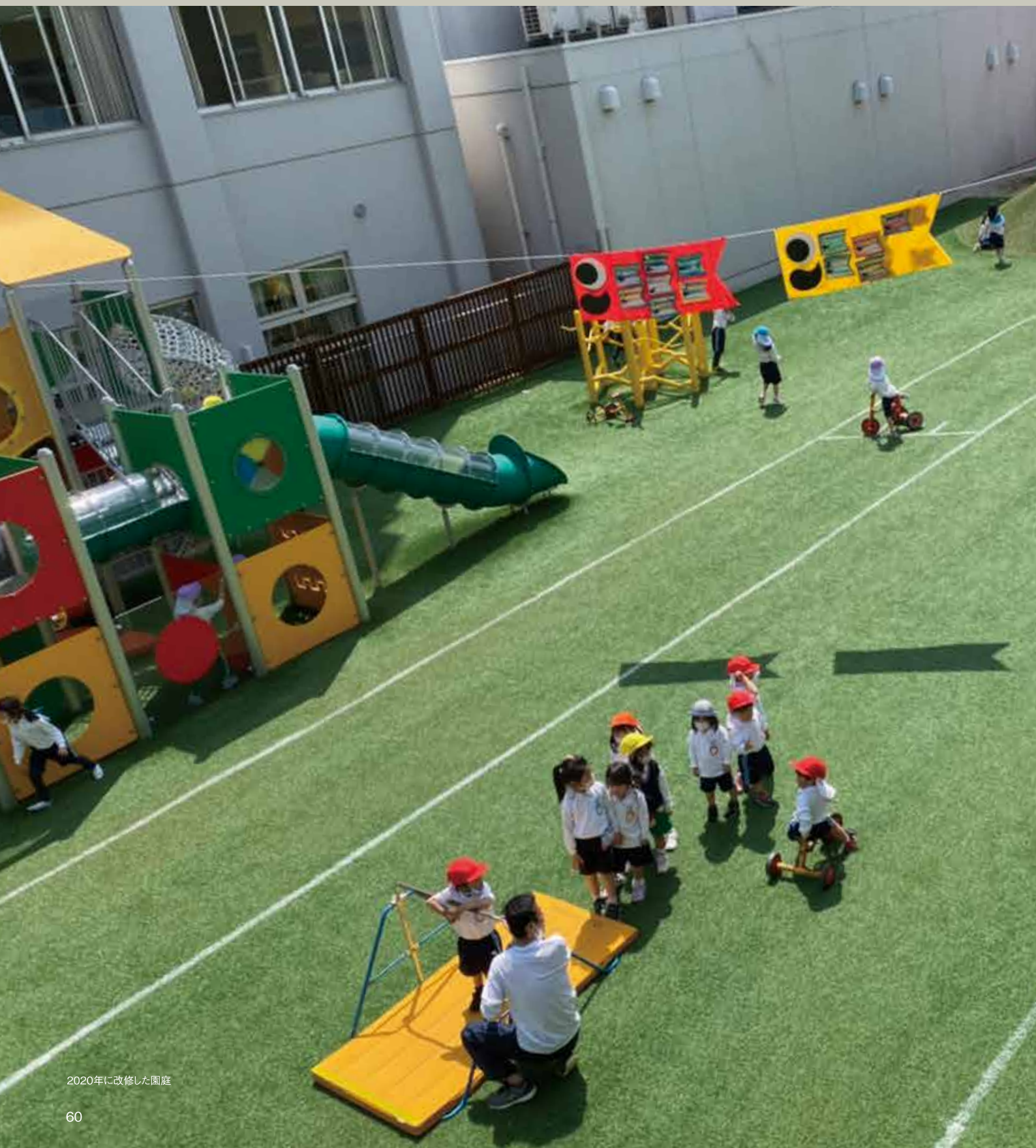
・

〈「命」・「仲間」・「平和」の大切さについて学ぶこと〉

同朋高校では様々な機会に「命」や「仲間」の大切さを共有しています。修学旅行では普通科・商業科は沖縄で、音楽科はオーストリアで「平和」の大切さを学びます。同朋高校はこれからも、そのような学びの場であり続けたいと考えます。

「やさしいこころ」、「自立のこころ」、「発意のこころ」。

同朋幼稚園



2020年に改修した園庭



同朋幼稚園 園長　吉田とき枝



同朋幼稚園は1952（昭和27）年に「東海同朋大学付属幼稚園」として開園されています。1945（昭和20）年5月、第二次世界大戦の空襲により焼け野原となった名古屋市西部中村区のこの地に、1950（昭和25）年、まずは東海同朋大学（同朋大学）が開学します。周辺では小中の義務教育学校が復興され、ようやく軌道に乗りかかってきた頃、この稲葉地・岩塚地域では、大学の開学と共に幼稚園設置が切望されたと聞いております。また1970年代半ば、近隣の幼稚園・保育所の急増や名古屋音楽短期大学の四年制大学化に伴う増築の必要性などにより、廃園の検討がされた場合においても、教職員や「母の会」による2,000名を超える署名・嘆願や当時の武田賢壽園長先生のご尽力により存続が決定されたとのことです。数々の危機的状況の中においても、開園当初の地域の方々の熱い思いや教職員・保護者の方々の熱意によって、今日まで70年近く脈々と続いてきたことに、改めて尊敬と感謝を申し上げます。

戦後間もない「何もないところから生み出す保育」の力、廃園の嵐の中で団結した力は何物にも代えがたい財産であると思います。そしてそこには常に〝同朋和敬〟の心が息づいていました。「共なるいのちを生きる」という建学の精神の基、「一人一人を大切に」という本園の教育目標は、「やさしいこころ・自立のこころ・発意のこころ」のキーワードと共に、いつまでも引き継がれることと思います。

2005（平成17）年に改正された教育基本法の中に、「幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」として、幼児期の教育の重要性が新たに明文化されました。また、2019（令和元）年10月からは「幼児教育の無償化」が始まりました。さらに昨今世界中に広まった新型コロナウィルス感染症対応についても、新しい生き方や考え方が求められています。今や予測困難な時代の中にあって、これから先どのような事にも立ち向かうことのできる子どもたちを育てるためにも、ますます幼児教育の質の向上が問われています。同朋幼稚園は、一人一人を大切にしながら、「遊びを通して学ぶ」といった21世紀型保育を実践し、学園・地域・保護者と教職員が手を携え、未来ある子どもたちのために一歩一歩着実に次の100年に向けて歩み続けていきます。

同朋幼稚園の歩み

1952（昭和27）年
・東海同朋大学の教室を保育室として同朋幼稚園開園
・園長に安田 力が就任

1953（昭和28）年
・愛知県より幼稚園施設の設置認可取得

1955（昭和30）年
・大学から独立した木造園舎新築

1957（昭和32）年
・園長に山上正尊が就任

1959（昭和34）年
・講堂兼遊戯室新築
・園長に小島叡成が就任

1962（昭和37）年
・創立10周年記念式典挙行

1972（昭和47）年
・園長に武田賢壽が就任
・創立20周年記念式典挙行

1978（昭和53）年
・2階建て鉄筋園舎完成（現園舎）

1980（昭和55）年
・鼓笛演奏の練習開始

1982（昭和57）年
・毎週2回の給食開始
・創立30周年記念式典挙行

1985（昭和60）年
・園長に濱田耕生が就任

1987（昭和62）年
・親鸞さまの幼少時代の像を玄関横に安置

1988（昭和63）年
・お泊まり保育、体操教室開始

1992（平成4）年
・創立40周年記念式典挙行
・「同朋幼稚園のうた」制定

1993（平成5）年
・園長に小野忠士が就任
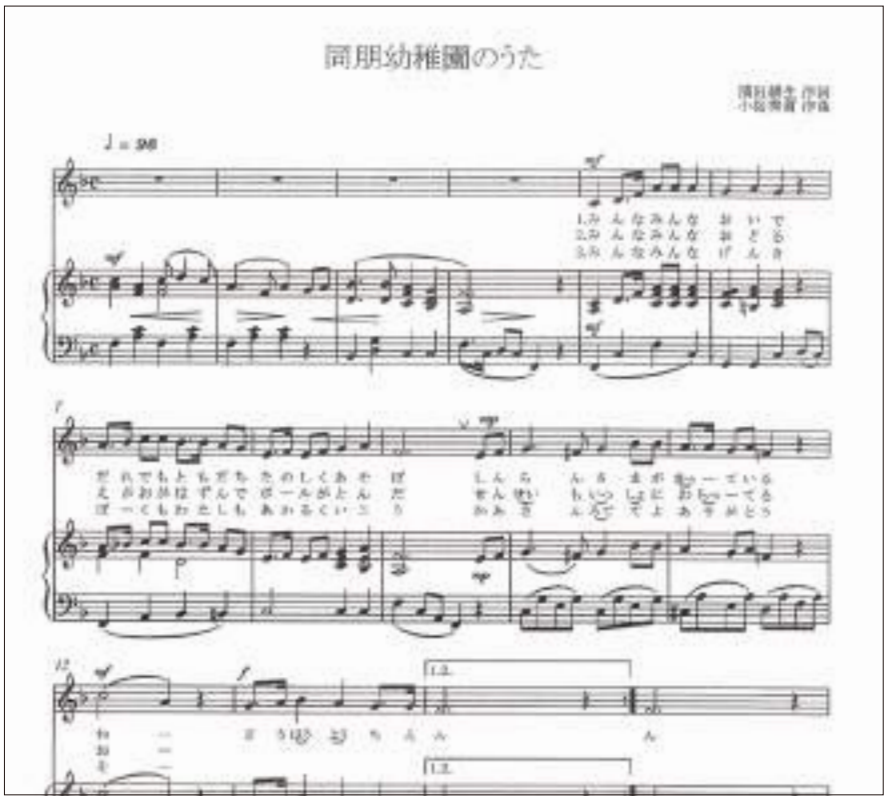
1997（平成9）年
・園長に瀧藤貞明が就任



昭和20年代の幼稚園職員



昭和20年代の幼稚園盆踊り



1992年「同朋幼稚園のうた」制定



1955年新築の木造園舎



東海同朋大学を背景に



幼稚園開園当初の正服



幼稚園開園当初の体操服



1953年 幼稚園同窓会



1982年 幼稚園30周年誌



1992年 幼稚園40周年誌



1990年代の卒園式





1987年 親鸞さまの幼少時代の像を玄関横に安置



1988年 お泊まり保育開始

1998（平成10）年
・英語教室開始

2003（平成15）年
・園長に寺本一美が就任

2005（平成17）年
・同朋大学の幼稚園教諭一種免許状取得課程設置に伴い、教育実習生の受け入れ開始

2008（平成20）年
・名古屋音楽大学による出張コンサート（同朋幼稚園音楽鑑賞会）始まる

2009（平成21）年
・園舎増改築、園庭拡張
・園長に田代俊孝が就任

2010（平成22）年
・満3歳児クラスを含む7クラス150名定員となる

2013（平成25）年
・園長に丹羽丈司が就任

2015（平成27）年
・幼稚園行事への同朋大学学生ボランティアの参加始まる

2017（平成29）年
・ICTを利用した保育始まる

2018（平成30）年
・園舎改修
・幼稚園教諭と同朋大学子ども学専攻教員による幼大連携ワーキンググループ始動

2019（令和1）年
・園長に馬越恵子が就任

2020（令和2）年
・園庭改修

2021（令和3）年
・園長に吉田とき枝が就任



1993年入園案内


1998年 英語教室開始


土の地面だった頃の園庭




幼稚園敬老会



2005年 同朋大学からの教育実習生の受け入れ開始



2008年 名古屋音楽大学による出張コンサート（同朋幼稚園音楽鑑賞会）始まる



2018年 幼稚園教諭と同朋大学教員による幼大連携ワーキンググループ始動



2018年 子育て支援ルーム設置



現在の園舎外観





現在の教職員



2020年 園庭改修



七夕まつり




豆まき


花まつり


メルヘン動物村

未来へつなぐ「手作り保育」の歩み

1950年、東海同朋大学（同朋大学）が開学するやいなや、地元の人たちから「ぜひ附属幼稚園を開いてほしい」という要望が次々に寄せられました。日本は速やかに戦後復興をはたしつつあり、教育改革も行われましたが、幼児教育についてはまだ十分に手が行きとどかず、当時の稲葉地・岩塚学区には、保育園や幼稚園がひとつもありませんでした。そのような事情もあったためでしょう、いまでは信じられないことですが、まだ正式な設置認可を申請する前の1952（昭和27）年春、地域住民の声に応え、同朋幼稚園は「東海同朋大学付属幼稚園」として実質的に開園することになりました。

といっても、まだ園舎も出来てはいませんでしたから、保育室には大学の教室を間借りしなければなりませんでしたし、机、椅子などの備品は、初代園長でもあった安田力学長が、自坊から児童用の机や腰掛けを持ち込んで間に合わせました。園児が使う遊具は、「母の会」の役員や先生が材料を持ち寄って作り、遊戯に使う音楽も、借りてきたレコードを使いました。まさにないない尽くしの開園で、主任保母を務めた菊田との代先生の言葉どおり「手作り保育」の実践でした。菊田先生は後に当時のことを「一日も早くりっぱに育てあげよう、と私は将来に夢を託して、この不完全、いや皆無に近い設備の中で不自由さと戦った」と回想しています。

こうして開園した同朋幼稚園には、初年次から300人を越える園児が集まりました。当時、東海同朋大学はまだ仏教学部仏教学科の一学部で、定員は40名でしたから、全学年の学生をあわせても園児の半分ほどにしかなりませんでした。大学の教員や学生たちは「軒先を貸して母家をとられたようなものだ」「これでは同朋幼稚園付属大学だ」などと苦笑しながらも、元気な園児たちを温かく見守っていました。そこには、すべての人が仏の子として互いに拝みあう〈同朋和敬〉の精神が、おのずと息づいていました。

開園した翌年の1953（昭和28）年3月、正式に設置申請を行い、11月には愛知県から認可を得ましたが、当然ながら施設の建設が条件として課されました。そこで保育室4室、面積およそ100坪の木造園舎が新築されたのが1955年のことでした。保育室の南側の園庭にはすべり台が設置され、1959年には御本尊を安置した遊戯室兼用の講堂が完成しました。当初の制服は、他の幼稚園と同じようなガウンではなく白色のエプロンで、左胸には黒の布地に黄色で刺繍をした園章をつけ、エプロンの下は自由にブラウス、女子はスカートで男子はズボンという、個性を大事にしたスタイルが採用されました。こういったこともすべて、教員たちが園児の保護者のみなさんと相談しながら決めていきました。カバンはランドセルが採用されました。

1945（昭和20）年の名古屋大空襲の名残で、開園当初は野原に近い状態だった稲葉地も、昭和30年代に入ると、あちこちに団地


運動会


雪あそび


お店やさんごっこ


ひなまつり発表会


もちつき

同朋幼稚園のこれまでとこれから

や会社の寮などが建ち始めました。1967（昭和42）年からは、それまで4歳児と混合一組で受け入れていた3歳児保育も正式に始まり、園児数も順調に増加していきました。

ところが高度経済成長も一段落ついたころから、周辺の市外・近郊に幼稚園・保育園の設置が相次ぐようになりました。また各園が送迎用のバスを導入して、遠方からの通園も可能にしたため、同朋幼稚園では園児の減少が目立ってきました。加えて、保護者の転勤による入園後の退園者も増加し、さらに園舎の老朽化、名古屋音楽短期大学の四年制大学化に伴う増築の必要性といった事情もあり、1970年代半ばには廃園の可能性も検討されました。しかし教職員や「母の会」の2,000名を越える署名・嘆願を受け、当時の武田賢壽園長も尽力されて存続が決定、1978年には現在の二階建て鉄筋園舎が完成しました。1980年代に入ると、鼓笛の指導、お泊まり保育、体操教室などが新たに始まりました。また1987年には、親鸞聖人の幼少時代の像が玄関横に安置されました。

1992年の秋、同朋幼稚園の創立40周年を記念して「同朋幼稚園のうた」が作られました。作詩は当時園長をされていた同朋大学の濱田耕生教授、作曲は名古屋音楽大学の小桜秀爾教授で、記念式典では名古屋音楽大学の大野恵子教授による独唱が披露されました。1996年には制服が一新され、ジャケットとブラウスにリボン、女子がスカート、男子がズボンとなり、カバンはランドセル型からリュック型へと変わりました。

時代が21世紀を迎え、2005年に同朋大学社会福祉学科に幼児福祉専攻（2009年より「子ども学専攻」と名称変更）が設立されたころから、学生の幼稚園教員免許取得のための実習先として、また後には学生ボランティアの活動を通して、同朋大学との連携が密接になっていきました。同じころから、名古屋音楽大学のオーケストラサークルNCM楽団によるコンサートも定期的に開催されるようになりました。近年は、小牧の名古屋造形大学キャンパスに行き、親子で陶芸や絵付けを楽しむアート体験や木工製作も行われるなど、三大学を有する同朋学園の幼稚園ならではの様々な催しも行われています。

同朋幼稚園の歴史は文字通り、ゼロからの出発、「手作り保育」の歴史でした。園の基礎を作り、開園から16年間にわたって主任保母・主事を務めた菊田（荒川）先生は、自らのモットーを「何もないところから生み出す保育は、情緒教育に欠かせない大切な心、〝同朋和敬〟の精神をもって人間性の素直な子供を育てることにある。私たちも、幼児一人が心の豊かな子に育ち、立派な社会人になるようにと願う心で保育する」と語っています。その思いは、同朋幼稚園が掲げる三つの教育目標「やさしいこころを育てる」「自立のこころを育てる」「発意のこころを育てる」という標語のなかに今もなお生きており、またこれからも生き続けていきます。

学校法人同朋学園 創立100周年記念誌

発行日―2021年6月11日
発行――学校法人同朋学園
　　本部事務局／〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1・TEL 052-411-1111
編集――学校法人同朋学園創立100周年記念誌部会
　　伊藤豊嗣・福田 琢・猪狩裕史・大岡訓子・柴田篤志・足立ゆうじ・佐藤昌子・寺澤年高
装丁――伊藤豊嗣
創立100周年ロゴマークデザイン――東仲雅明
学園新シンボルマークデザイン―――三村章太
表紙デザイン――――――――――伊藤豊嗣・三村章太

◉本書を無断で複製・転載することを禁じます。